
夏の陽炎

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の陽炎

【Nコード】

N6394H

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

昭和40年代、女子大生香澄の周りで起きる、さまざまな事件。それが、平成になって思わぬ方向へとつながっていたことがわかる。

ブローグ

ブローグ

大沢高校は四国内では、結構名が知れていた。しかし、香澄はそんなこと気にも留めていなかった。姉が行ったから私も行く。それぐらいの感覚だった。公務員の父は、初めから、私立など考えていなかったし、母も専業主婦だし、三女の香澄にとっての受験は大沢高校だけだった。

あまり、無理もせず、受かってしまった。まだ、集団就職で県外に行った友達もいた時代だ。そうよ、この年は万国博覧会が大阪で開催されたっけ。

香澄にとつて、姉二人はあまりにも有名で、しんどかった。

長姉の一美は賢く、すべての学校で一番だった。つまり、小学校でも総代、中学校でも同様。高校でももちろん。大学は国立の有名などところ。次姉は美人で、化学が得意なスポーツ少女。足も速ければ、頭もいい。いつも、先生が帰りは送ってくれるほどだった。香澄は中学までは賢いはずだったが、高校になると、英語も数学もわからなくなった。先生はいつも姉たちと比べ、

「おい、香澄、姉ちゃんはずい出来たぞ」

とか、いうので、よけいに勉強が嫌いになった。だが、決して姉たちを羨ましくは思っても、憎くはなかった。自慢でもあった。母が、姉二人が県外に行ったので、地元には置きたかったようだった。しかし、地元には国立しかなく、その大学には届かなかった。香澄は一番安い私立大学を調べ、親に許しをもらって近畿に行った。

近畿の山奥にあるこの大学は、のんびりとしていて、香澄は必死になって教員免許も取るために、朝早くから午後の四時まで高校生のようには時間割を作ったものだ。おかげで、「ノートの香澄ちゃん」とあだ名が付けられ、みんなが借りにきたものだ。

そんな香澄に、ある日、おいしいバイトの口が見つかった。

「あのね、パーティーの時にお酒を注ぐだけ、それで1万円。どう？私も行くし、心配ないって。」

彩加はそういうけど、私はそんなこと苦手、しかも、酒飲みは父だけでいい。嫌いだ、くどくていやらしいのは。

しかし、このところ、母の仕送りが遅れて、いささか困っている。わかった、今日だけよ。あてにしないでね。私、こういう仕事嫌いなんだから。」

「うん、言う通りにする。今回だけ。」

百合はいつも調子がいい。でも、やさしくて、つつい私も彼女の言う通りに動いてしまう。

「あのね、駅に三時に集合、みんなで行くの。行きは電車で帰りはタクシー。旅館で五時から開始、最終の電車には間に合わないから、タクシーを雇ってくれるって、いいでしょう」

このころは、タクシーなどあまり乗れなかった、貧乏学生には。

心地よい響きのタクシー。しかも、時給380円のころなのだから、香澄は何を着て行くのと聞いたら、あんまり地味はだめと言われた。派手なものといっても持っていない。すると、百合は、

「私が持つていくから、それを着ればいいよ。」

「そう、ごめんね。持つてなくて」

「でも、このバイト続けるなら、ママが着物も貸してくれるって」

その話には返事が出来なかった。香澄がやるのは明日だけ。父が聞いたら腰を抜かすだろう、母は気絶するかもしれない。

秘密なんだから、明日だけ。

翌日、呼ばれていたのは7人だった。みんな女子大生。それぞれおしゃれをして、化粧もしていた。百合は着物姿で、本当に夜のコンパニオンそのものだった。チイママということで、張り切っていた。香澄は、早速袋からワンピースを取り出し、トイレで着替えた。

裾に赤のラインが入った白いワンピース。高そうだ。汚してもいいからって言ったけど、そんなことできない。

「あら、よく似合うじゃない、香澄ちゃん」

「そうかな？私には無理よね、こんなワンピース」

「そんなことないよ、よく似合ってるよ」

と、百合に言われると、なんだか気分も良くなってくる。

旅館は、35人のお客で、九州の食品工場の社長さんたちだという。百合も香澄も酒を注ぎ、料理をとりわけ、忙しく動いていた。すると、酔っ払った一人の社長が、もう一人と両脇からコンパニオンの手を動けないようにして、スカートをまくりあげた。

「いやあ、やめて。やめてください」

女子大生と知って興奮しているのだ。こういうときは素人では足元を見られて余計に悪さをするって、女将がいつてたっけ。

香澄は

「やめてくださいっていつてるでしょう」

と、スカートをたくしあげた社長に食ってかかった。百合は

「だめでしょ、社長さん」

と言いながら香澄の前に立ち、顎で合図して

「お酒が足りないから、香澄ちゃん、もらってきて」

と、香澄を追い払った。香澄は悔しかったが、ここは雇われてるんだからと、百合に散々言われてたのを思い出した。女将さんもとりなして、女の子は放してもらったが、やっぱり引き受けるんじゃないかったと大いに後悔した。

お銚子をとり、運んでいる途中、ひとりの紳士が声をかけてきた。「香澄さんっていうのか、駄目だよ、こんなところで働いちや、大學生なんだろう？」

見るからに優しそうな、上品な雰囲気の人だった。でも、さっきの社長のように飲んだら変身するタイプは多い。酒に飲まれるって

やつだ。しかし、この紳士は違った。名刺には、石田食品社長と書いてあった。福岡で200人雇っているという。名刺をもらっても仕方がないとは思ったが、今は仕事からだ。

「ありがとうございます。社長さんはお酒強いんですね。ひとつも変わらないですね」

「そんなことないよ、大酔いさ。でも、きれいなお姉さんたちがいっぱいだから酔えないよ」

と、おどけて石田社長は言った。でも、その言い方もあっさりとして、香澄は笑いながら

「そうですか、もうそろそろ、お開きですよ、ゆつくり休んでくださいね」

「そうか、残念だな。今度は来月まで、またしっかり働かん」と

「えっ、来月もこちらで会があるんですか」

「うん、でも、今度はこんな大人数じゃないけど、取引先の社長らとゴルフのコンペだよ」

「なんだか、すごいですねえ。私のような学生には夢のような話です」

「ほう、何回生かな」

「実は4回生。もう就職について考えないと」

「そうか、九州の田舎でもよかったらおいで。漬物屋だけど、そこそ軌道に乗ってるから、給料はまあまあだよ」

「うわあ、期待しちゃおうかな。でも、田舎に帰るんです。父も母も末っ子くらいは手元に置いておきたいって」

香澄は自分のことを何でも話してしまいたくなった。なんか安心させる雰囲気石田浩二にはあった。石田もこの女子学生コンパニオンが、玄人っぽくなくて新鮮に思えた。

「香澄ちゃん、もうお開きだから。こっちへ来て。社長、独り占めはだめよ、うちの香澄ちゃんを」

百合はいかにもママらしく、気取って言った。だが、香澄と同年だ。

「はいはい、お返ししますよ。香澄ちゃんをまた呼びたいなあ。今度のゴルフコンペの後に。ママさん、名刺をくれるかい、連絡するから」

「でも、私は……」

と言いかけたとき、百合は目配せして、

「はい、これです。大川コンパニオンサービス、よろしく」

香澄は今回だけなのに、そんなこと言っているのかなと心配した。石田さんはいい人だから、また、会ってもいいと言えればいいけどと考えていた。

百合から1万円入った封筒をもらい、今日の仕事はこれで終わり。やっと、心理学の本が買える。高いからこのバイト代はとても助かる。

このころは下宿の女子寮に、ピンクの公衆電話のみ。その1台に10人の学生が使っているから、親の仕送りが遅いときは、並んで電話を待ったものだ。香澄の隣の秋野洋子はまだ2回生。でも、この間は彼氏を連れ込んで、部屋でいちゃいちゃしているような声が聞こえて、翌日みんなで聞えよがしに文句を言いあった。

「やめてほしいわ、部屋に入れるの。私たちまでそんなことしているみたいって思われそう。近所に格好が悪いわ」

堅物の今井理恵は聞こえる声で怒っていた。

「まあまあ、それにしても、洋子ちゃん、この前の彼氏と違ってたよ。お盛んね」

「すごいねえ、加奈ちゃんもつれてきたら」

「今井さん、この前、大学前でかっこいい人と待ち合わせしてたでしょ、あの人彼ですか」

そう聞かれた理恵は少し得意気に

「えっ、ああ橋本君ね、彼じゃないわよ、ノートを貸したお礼って、昼ごはん奢ってくれたの。それだけ」

「そうは見えなかったなあ。だって、理恵さんきれいだったもん、

おしやれして」

そんなところへ、電話が鳴った。

「はい赤石寮です」

と理恵が電話を取った。見る見るうちに顔が青ざめて、

「はい、中野愛子は確かにここに住んでいます。昨日は帰ってません。札が青のままですから。でも、確かめてきます」

玄関には青札と赤札があり、留守の時は青にして在宅の時は赤をかけるのだ。

すぐに香澄が2階の7号室に行った。鍵もかけず、誰もいない。

「いませんよ」

と、2階から大声で叫んだ。理恵はすぐに

「やはり、帰ってません。何かあったんですか」

「わかりました。すぐに、大家さんと連絡して、家の電話番号を伝えます。そちらは110番ですか。あ、違うんですか。はい、わかりました。すぐに京都市警へかけます」

京都市警と聞いて、みんなびっくりした。

「どうしたの、愛子さん」

「何があったの」

と、口々に言っている間に、理恵はサンダルをはいて、隣の大家のところへ走って行った。

「赤石さん、大変です。中野さんが死んだそうです。今、警察から電話があつて、京都市警に実家の連絡先を教えてください」

第1章

第1章

岡山からきた愛子の両親と弟が対面した、愛子の姿はむごいものだった。

顔は殴られ、腫れ上がり、右腕はねじり上げられたのか、骨折していた。足は無数の青いあざ。膣は傷を付けられ、鑑識も目をそむけるような刃物のあと。

「ああー、ああ、愛子、誰が、誰が、こんなひどいことを…」

髪を振り乱して、わが子にすがりつく両親を支えながら、弟は「許さない、きつと捕まえてください。こんな目に犯人も合わせてやる」

加納刑事は、なんともつらい光景を何度も目にしてきたが、今回ほど、痛めつけられている遺体は初めてだった。

「犯人は複数です。体液も4人検出されました」

「ああ、ああ、ひどい、何人もで、私の愛子を」

父は腰が抜けるほど泣き崩れた。本当に可愛かった愛子、この間の父の日には、煙草のケースを買ってくれた。なんということだ。そのうち、母は倒れこんだ。あまりのことにショック状態になり、救急病院へ運ばれた。弟の省吾は、母を抱き上げたとき、母も死ぬんではないかと感じた。そして、そのまま感じたとおり、病院であっけなく母は息を引き取った。

一度に二人の家族を失い、二人の葬儀を出すことになった中野家は、悲しみに浸る間もなくてこ舞いの忙しさだった。密葬とはいえ、父の会社関係、親族、そして愛子の友人が次々と訪れ、今にも倒れそうな父を気遣い、省吾は葬儀に自分が喪主となって葬儀を執り行った。

加納刑事は京都から来ていた。葬儀が終わり、葬祭会館から家路

についたとき、父と省吾は玄関にたたずむ刑事に会釈した。

「わざわざ、お越しいただいて、ありがとうございます」

「いえいえ、本当にお気の毒で言葉が見つかりません」

「もう、私は二人のところへ行きたいです」

嘆き疲れた中野の父は、本当に消えそうで心配だった。省吾は20歳とは思えないほどしっかりしていた。彼がすべてを取り仕切ったというのも、かわいそうでたまらなかった。そこいらの20歳はまだ、そんなことできないだろう。

「刑事さん、どうぞ、中へ」

と省吾に勧められ、家に上がった。父は

「すみません、疲れて具合が悪いので、横になりたいので…」

「どうぞ、私は省吾さんと話がしたいので」

よろめきながら、父は横になった。

加納はお茶を入れてくれる省吾に、

「お構いなく、お疲れでしょうが、聞きたいことがあるので」

「何でも。早く犯人を捕まえてほしいので」

省吾は愛子と同じ京都市内に下宿をしていた。姉とは1か月に1回くらい会っていたという。姉はバイトで家庭教師をしていて、その家は下宿の近くで自転車を通っていたそうだ。しかし、事件の日には家庭教師の日ではないという。

香澄は愛子の葬儀には行かなかった。愛子とは仲が良かったが、密葬と聞いていたし、葬儀の日はずみの大事な発表があった。落ちてから岡山へ行くつもりだった。省吾のことはよく知っており、2歳下だけど心惹かれていた。その省吾の嘆いている姿はつらくて見られなかった。香澄は愛子の放置されていた場所が、比叡山近くのドライブウエーと聞いて、あんな寂しいところまで連れていかれて殺されたことがたまらなかった。新聞ではその遺体の傷つけられた様子はわからなかったが、週刊誌に詳しく書かれていた。たぶん帰り道に連れて行かれたとすると、犯人たちはこの近くにもいるか

もしれない。それがどうしようもなく恐ろしい。一人で出歩かないようにと、女子寮のみんなは声を掛け合い、買い物も夕方以降は控えた。

そんなある日、彩加と百合が、また、あのバイトを手伝わないかと声をかけてきた。

「だめよ、1回きりっていったでしょう」

香澄がそういうと、百合は

「うん、私もママにそう言ったけど、あなたにご指名なのよ」

「指名？ 誰？」

石田社長だった。そういえばゴルフがあるって言ってたけど、来月じゃなかったかな。

「あのね、急に京都の会社と取引が決まって来るんですって。それで接待をしたいからって言うの」

「フウン、でも、そんな接待なら、プロがやったほうがいいわよ」

「ママも心配で出るって言うけど、あなたにも来てほしいって。とにかく電話してあげて、断るにしても、私は伝えてほしいって言われたから。これが電話番号」

「わかった。電話する」

百合にごねても仕方がない、自分で断ろうと、早速学校の公衆電話からかけた。

「はい、大川コンパニオンサービスです」

「あの、上野香澄です。百合さんから聞きましたけど、お断りします」

「まあまあ、そう言わずに。石田さんが個人で頼んでくれるのは今回初めてなのよ。だから、2倍出すからお願い」

2倍か、思わず気持が香澄の気持ち揺れる。

「場所も、市内のホテルだし、2時間で、2万」

「わかりました、ママ、今回で本当に終わりですよ。私、就職活動しないといけないから」

「ありがとう、助かるわ。今回だけよ、もちろん」

石田は5人のお客を連れて来ていた。ママはびっくりするくらいきれいに化粧していた。百合と香澄は、ママの着物を借りて髪もアップにした。

「ほう、きれいなコンパニオンばかりだな、やるな石田君」

「いやいや、私もびっくりですわ。こんなにきれいだったなんて」

全部で6人、それぞれの間にコンパニオンが入って、お酒を注ぎ小皿に料理をとりわけたり、話も下品なものでなく、仕事や経済など聞いて楽しい話題ばかり。香澄は仕事だということを忘れるほどだった。

「香澄ちゃん、その後、就職活動は頑張っているかい」

「いいえ、頑張ってたらず、ここへ来ません」

「いやあ、すまんすまん。勉強を割いて来てくれたのか」

につこり笑いながら香澄は石田に酌をした。ママと百合は

「そうよ、勉強しないといけないのに、石田社長の頼みだから香澄ちゃん来てくれたのよ」

「おつ、石田さん、隅に置けないねえ」

と、佐々木社長も冷やかした。和やかな食事は無事に終了し、ママは百合と香澄にバイト代を渡した。指名されると5千円プラスで1万5千円と、百合は思っているようだ。だが、香澄の袋には2万円入っていたので、思わず百合に内緒にした。

「香澄ちゃん、これから私、彼氏とデート。着物姿を見せろって言うから、行ってくる」

「わかった、いいわねえ。私は市バスで帰るわ。まだ早いから」

百合の見送りを受け、香澄はバスに乗った。お酒が入ったが、今日の仕事は楽しかったと思っていた。石田社長は女子大生のコンパニオンでも、香澄の賢い受け答えを気に入っているようだった。また、指名したいと言ったが、石田ならいいかとも思っていた。

神社前に着くと夕方とはいえ、明かりがなく真っ暗だった。いつもはひとりで帰ることやめていたのに。ちょっとこわいなあとはい

小走りで帰っていた。

「キヤー」

神社の境内のほうから悲鳴が聞こえた。3人の男が、女の子の腕を掴んで、車に乗せようとしていた。あれは、

「理恵さん、大丈夫ですか。誰かあ、おまわりさあん」

と香澄が大声を出したので、男たちは理恵の手を離し逃げて行った。

駆け寄ると、理恵の額から血が吹き出していた。

「理恵さん、理恵さん」

近所の人が香澄の声に気づいて出てきたので、あわてて救急車を呼んだ。理恵の額は鈍器で殴られたようだった。

「なんてひどいことを」

加納刑事は香澄の話聞きながら、愛子を襲った4人組ではと感じた。一人は運転手、あとの3人でまず頭を鈍器で殴って気を失わせるのか、ひどいやつらだ。香澄はまだ震えていた。理恵は15針も頭を縫った。しかし脳への損傷はないとのことだった。

病院で傷の手当をしながら、入院して検査をするということだった。

「上野さん、心当たりはありますか。」

香澄は首を振るだけだった。加納刑事は4人ということを書きとめ「この前は手がかりがなかったんですが、今回は車があり、犯人の数が4人ということもありました」

「はあ、でも、車にもっと乗ってたかも。よく見えなかったし」

「それはそうです、わかる範囲で、何でもいいので思い出して下さい」

考えているうちに、恐怖で泣けてきた。泣きじゃくる香澄を落ち着かせるために、コーヒーを淹れてくれた。

「あの、3人とも背の高い人ばかりでした。みんな黒っぽいTシャツでした。髪も長かったとそれぐらいしか」

「車はどんな色でしたか」

「白っぽいセダン、車種などはしりません」

「思い出したらいつでもいいので、電話をください」

「わかりました」

加納刑事は顔色が悪い香澄を心配して、

「送っていきます、だいじょうぶですか」

「ええ、落ち着いてきました」

「今日はどうして着物を？」

「バイトです。コンパニオンの」

香澄は間抜けな女子大生と思われなかと、絶対にもうこのバイトは止めようと決心した。

第2章

第2章

この女子寮が狙われてるんじゃないかと、警察が見張りをつけてくれた。だんだん怖くなって、この寮を出ていくという人もいた。大家の赤石は困って、そんなことないと思うが、といいつつも、犠牲者が2人目となると責任もあるし、みんな好きにしてくださいとのことだった。

香澄は怖かったが、あと8カ月で卒業と思うと、もったいない気もして我慢することにした。また、ここは風呂はないし共同のトイレと台所だが新しくて安かった。入学のときに新築だったから4年目だし、赤石はいい人だった。それに、住人もみんな気心が知れていた。でも、愛子が亡くなってしまい、理恵は怪我をしたが、理恵はここに住むと言って戻って来た。

香澄はこの寮が狙われているんじゃないかもしれないし、刑事が捕まえてくれるだろうと思った。

秋野洋子は落ち着かなかった。仁は香澄のことが気になっているみたいだった。香澄は4回生で、この間は着物を着ていた。バイトで着たとはいえ、仁は街で香澄の着物姿を見てきれいでびっくりしたとい話していた。洋子は自分もバイトを教えてもらおうと、香澄の部屋をノックした。

「いますか、洋子です」

「はあい、どうぞ」

「あの、バイトを紹介してほしいんですけど」

「えっ、例のコンパニオン？」

「はい、お願いします」

香澄は考えてしまった。洋子は2回生。お酒の場所なんていいんだろつか。決していいことばかりじゃないんだけど躊躇した。

「洋子ちゃん、私もやめようと思っているの。結構いやなことあるし、酔った人の相手よ。水商売だから」

「でも、バイト料いいでしょ、洋服も着物も貸してくれるんでしょ」
「それはそうだけど、あなた二十歳になった？」

「ええ、先月で」

「うーん、そう。じゃ、連絡先は大川コンパニオンサービスっていうの」

ママからもらっていた名刺を洋子に渡した。洋子は眼を輝かせて「ありがとうございます」

と言って出て行った。いやならやめるだろうと思って、二十歳ならいいかと香澄は思った。

仁は、洋子がコンパニオンのバイトをするというので心配していた。他の男に言い寄られるんじゃないかと。洋子は顔立ちも華やかなので、ママはすぐに雇ったようだ。今日は青年実業家のパーティーだった。香澄は断っていたし、百合や彩加はもっと年配の社長のパーティーに呼ばれていた。洋子はママが連れていくということで着物を着せてもらってご機嫌だった。帰りに仁に見せてやろうと思っていた。

烏丸のホテルに行くと、ママがかき集めた4人が紹介された。それぞれ女子学生とわかると、途端に砕けた雰囲気になった。ママは内心ガキの集まりかと舌打ちをした。こういうときは手慣れた子が多かったと後悔していた。新人が多いので飲み方もわからず飲んでしまう。これでは心配と、百合の行ってるホテルに電話をした。

「百合ちゃん、すぐ来て。そっちは爺さんだから心配ないけど、こっちは尻の青いお兄ちゃんばかりだから、しっかり者がいないとメチャメチャになるから」

「わかった、ママ。こっちは彩加に任せて行くわ。20分くらいで着くと思う」

「お願い、頼りにしてるの」

電話を切って部屋に向かうと、案の定、洋子に酔っ払ったブティック経営の社長が、帯をほどこうとしていた。

「何をしてるの、お客さん、そんなことコンパニオンのサービスと違います」

と、ママは怒って洋子のところへ行こうとしたが、他のお客もニヤニヤしながら

「あとで、サービス代払うから」

と言いながら、ママを掴んで離さない。

「ママ、助けて、やめて」

と泣きだす洋子に、ますます客のテンションは上がっていくようだった。

洋子の名古屋帯は解かれ、腰ひもを外され、長じゅばん姿になった洋子は、部屋を逃げようとしたが、それぞれの入り口に男が立ちふさぎどうすることもできない。ママも羽交い絞めされて、着物をたくしあげられた。とにかく若者が10人もいるのだ。

ほかの女の子も3、4人がかりで押さえつけられているからどうしようもない。

百合が来た。ホテルマンをひきつれて

「開けて、警察を呼びますよ」

というと、客は身づくろいをしながら、女の子から離れた。

「ママ、大丈夫？」

百合はママのところへ駆けより声をかけた。ママは

「私は大丈夫。洋子ちゃんは？」

洋子は下着を脱がされていた。だが、そこへ百合が来たので助かった。

ホテルもママも、客の悪ふざけということで、表ざたにはしないことになった。しかし、今後は一切この客の誘いは断るとして、料金も弁償としてかなり払ってもらうことになった。

こんなことがあるから、香澄はいいバイトじゃないって言ったの

ねと洋子は思い切り後悔していた。

洋子は慰めてほしかった。仁に会いに行こうと、アパートに向かった。

3階の奥が仁の部屋だ。ここは社会人も学生もいたが、男ばかりのアパートだ。着物はもう返した。バイト料は3万円くれた。あんなことがあったと他言しないようにと、ママが口封じにくれたのだ。「仁、いる？」

と声をかけたが、中から返事はなかった。ノックをしても出てこない。

仕方なく帰ろうとした。涙がこぼれてきた。

すると、仁の向かいの部屋の厚木が顔を出した。

「仁は駐車場のバイトに行ったよ」

「そうですか」

「今日は10時までって言ってたよ、待つかい？」

「いえ、いいです。今日は帰ります。厚木さん、この前理学部の掲示板で優秀賞をもらったって書いてましたよ」

「ああ、あれね、少しはがんばっているんだよ。学校に6年もいるとね」

笑いながら厚木は答えた。洋子はなんかほつとした。

「明日来るって、仁に伝えてください」

というと、洋子は階段を下りて行った。やっぱり、ここに来てよかったと思っていた。

北村加奈は風呂帰りだった。生理が長引いて4日も銭湯に行けなかった。やっと終わって行ったが、こんなときは内風呂がほしいとつくづく思う。今日の講義は難しく、また、単位が取れないかもって気になった。法学部の北岡先生はいじわるだ、黒板に少ししか書かないのに、出す問題はやたらと記述式。

すると、中野愛子の弟に会った。

「あら、省吾君。こちらに帰ってきたの。大変だったね」

「加奈さん、こんにちわ。寮へ行くところです」

たくさんの袋を持っていた省吾は

「つまらないものですが、決まり事というので」

香典返しを渡しながら、白いカッターシャツに、黒いズボンの省吾は、いつもよりずっと大人っぽく見えた。

「こんな恰好でごめんなさい、お葬式は無事終わったのね」

加奈はかぶるだけのワンピースで、洗い髪がばさばさで恥ずかしかった。省吾はそんなことは気にしないように、

「皆さんの気持ちがありがたかったです。姉は短い人生の中でも、この寮は本当に楽しそうでしたから」

「私たちも、愛子さんがいてくれたから、ずいぶんと助かったのよ。いつも優しくて」

二人の間に少しの間沈黙があつた。お互い思い出しているようだった。

並んで玄関に入ると、香澄がいた。

「省吾君……」

言葉が出てこない。それきり香澄は泣き出した。加奈は二人きりにして、部屋へ帰った。

愛子の部屋は、荷物がまとめられていた。みんなが箱詰めにして、布団袋に入れ、整然としていた。

「ありがとうございました。」

「うん」

二人は年が違うが、今本当に心が通い合っている気がした。黙っている香澄の手をとり、省吾はこう言った。

「香澄さん、僕、岡山に帰るんです」

「えっ、何でなの」

「父がすっかり、気持が萎えてしまって、ほっとけないんです。昨日も包丁を持つと見つめてたり、鴨居にひもをかけようとしたりで、今日は叔母にみてもらってきたんです」

かわいそうに、急に愛しい二人を亡くしたから、気持が保てない

んだ。香澄はまた泣きだした。

「しばらく、落ち着くまで家にいて、大丈夫になったら、復学します」

「ほんとよ、あなたは才能あるし、愛子にとって自慢の弟なんだから。でも、おじさん、本当にお気の毒だわ。あなたも、大丈夫？」

「ええ、何とか。でも、香澄さんの顔を見たら、なんかたまらなく……」

初めて声を押し殺して、省吾は泣いた。今まで気を張っていたし、父が心配で眼を離せなかったし。でも、今は泣いても許されるような……姉さん、泣いても怒るなよ」

香澄は胸に省吾の頭を抱き、二人で静かに泣いた。

第3章

第3章

省吾は荷物をまとめながら、ひとまず、着る物だけをまとめた。いつまでかかるかわからないが、とりあえず犯人が捕まらないと、姉も母も浮かばれないと思っていた。父は米を作りながら、農協にも働きに行っていた。母は近所の喫茶店にパートで勤めていた。みんなさやかな幸せを喜ぶような普通の家族だった。姉は頭もよく自慢の姉だった。家庭教師の家からも過分な香典をもらった。よくしてくれたからと。省吾はまだ、お礼に行つてなかったから、今日行つておこうかと思い、香典の書留の住所を見た。北区だ、赤石寮の近くだなと思った。木下健一さんかとおつばやいた。

加納刑事は、この頃の高校生や大学生はどうなってるんだと、怒っていた。というのも、昨夜、赤石寮の近くで張り込みをしていると、花火をたくさん持つて、駐車場で騒いでいる。こんなところであるなど注意すると、そばにいた高校生が

「すぐ、怒るおじさんが多くて、いやになるわ」

とほざく。くそ、親のしつけがなつとらんと加納は舌打ちをした。あの車はあのバカ者の車か。古いカローラ。花火はあの車から出してたな。ふん、全く。色は白っぽかったな。癖で記したナンバーは京都の。加納刑事は白いセダンって言ったことを思い出した。調べてみるか…ともう一度ナンバーを見た。

木下健一は、今日も妻から言われていた。

「武史の学校からまた、呼ばれたのよ。今日はあなたが行ってよ」

「俺は仕事だ、家庭はお前だろう」

「そんなこと言つて、逃げてばっかり。私は真一のところへ行かな

いと、研修医の担当の先生に中元を渡しにいかない」と

「金を送らないといかんなんて、医者になってもか」

「そうよ。中野先生が亡くなって、武史もやる気をなくしちゃって、きれいな先生だったから、あの子も可哀そうよ。大丈夫かしら、高校の先生も急に成績が落ちて心配してるから」

「とにかく、俺は大事な会議があるから、高校へは行けん」

「はいはい、私が行きます。新しい家庭教師の先生に来てもらわないと。中野先生の後、来る人来る人嫌だなんて」

2階で武史はベッドに寝転び、階下の言い争いを聞いていた。いつものことだ。

手に握っていたのは、愛子のストッキング。

血が付いていたのをポケットに入れたのだ、あの日。

愛子はやさしく教えてくれた。バレンタインにはチョコもくれた。義理チョコといっても、武史はうれしかった。素敵な家庭教師でみんなが羨ましがった。聡も敦夫も周平も。まさか、あの夜、聡が車を3万で兄貴から買って初のドライブ帰り、先生を見つけた。聡が「送ってやろうか」

と声をかけて、武史も窓から

「先生、俺だよ」

と顔を見せたら、急に愛子は緊張した顔から、うれしそうな笑顔を見せた。

「こんな遅くに、遊んでちゃダメでしょ。受験生が」

と言いながらも、もう警戒していなかった。武史はほんとに乗せるだけのつもりだった。しかし、あとの3人は違っていた。愛子が乗ると、はじめは話をしていたのに、敦夫が急に押し倒したんだ。

「どこかへ止めろ」

と聡に命じてあの河原に連れて行った。

愛子はもがき、脱がされたストッキングで猿ぐつわをされた。武史は呆然と立ち尽くしていた。抵抗をやめない愛子を殴り、腕をね

じりあげると、愛子は悲鳴を猿ぐつわからもらした。そして骨が折れた。もう愛子は何もできなかった。武史を悲しそうな目で訴えていた。みんなは静かになった愛子を脱がせて、初めて見る女体を弄んだ。受験の鬱憤が爆発したように。

「おまえもやれ」

と、愛子の前に引つ張られ、泣きながら武史は犯した。愛子があまりに見つめるから、怖くなって石で殴った。3人は味をしめた。犯しても殺せば捕まらないと。死んだ愛子の口から猿ぐつわを外し、武史は持つて帰ってきたのだ。

「先生…先生…」

と布団に顔をつけながら、武史は泣いた。

香澄は、学校の掲示板に募集の張り紙を見つけていた。コンパニオンはやめたんだから、家庭教師のバイトでもと探していた。値段がいい家庭教師の口があった。高校3年生。社会と国語。これなら、自分でもいけるかもしれないと香澄は住所と電話を控えた。西賀茂なら近い、木下健一。

省吾はそのころ、木下健一の家に行っていた。

「中野省吾です。姉がお世話になりました」

と言うと、母親は武史を呼んできた。

「こんにちわ」

と声をかけても、武史は真っ青な顔で礼をただけだった。そんなにショックを受けたのかと、省吾は姉のことを忘れない人がここにいると心底思った。最後まで、武史は話をろくにしなかったが、姉の本を1冊渡すと泣きだした。

「大事にします」

と、絞り出すような声でやっと武史は言った。省吾はもうここには来ることないだろうと思った。

角を曲がると、古いカローラがやってきて、木下家の前で止まっ

た。省吾は振り返ることもなかった。

敦夫、周平、聡は先日失敗したから、またやろうと誘いにきた。しかし、あれから気が重くなる一方で、武史はもうやめたかった。もう、あんな眼で見られたくない。武史はやりたくないと言つと、3人は

「おい、お前だけ逃げるのか」

「やろうよ、捕まらないように、今回はもっと計画的に」

「いやだ、もういやだ」

武史は愛子の本を握っていた。タイトルは「人間失格」、愛読書にくれたのだ。弟もいい人だ。武史はもうできない。

武史がいい返事をしないので、3人は帰って行った。一人が抜けると、やる気も失せていくのか。

第4章

第4章

香澄は新しい家庭教師の口を見つけてうれしかった。

木下武史は、中野愛子の教え子だったと武史の母親が教えてくれた。とてもいい先生だったと。でもその話になると、武史が暗くなるのもう言わないことにした。真面目で言われたことは必ずやっておくし、友達ともあまり遊ばなくなつたと、母親は喜んでいた。成績も上がってきて、給料もアップしてくれた。

今日は省吾が久しぶりに京都に帰ってくると聞き、香澄はお父さんも元気になつたみたいでよかったと思いついにやけてしまふ。

「先生、何思い出し笑いしてるの」

「えっ、何でもない。さあ、今日はここまで。私が採点してみたところ、今回も模試はいい点取れてると思う。やりがいがあるな。お利口さんの生徒で」

「へへへ、ずいぶんと自分でも頑張つてると思う。」

「ねえ、この太宰治、君が買ったの？」

人間失格、少しの沈黙の後、武史は

「ううん、もらいもの。中野先生の弟さんが姉の好きな本でしたっで、くれたんだ」

「あら、省吾君が」

「先生、弟さんも知ってるの？」

「ええ、愛子さんのところへよく来てたから」

武史はこういう話題になると、いつも顔色が悪くなる気がする。そんなに慕っていたのか、かわいそうにと香澄は考えていた。武史は本を手にとると、懐かしむように棚に入れた。

「では、これで、私は帰るね。来週、またよろしく」

「ええ、先生。もうそろそろ志望校を決めて学校のほうへ連絡するんですが、そのことも相談に乗ってください」

「了解、では、武史君さようなら」

台所にいた母親が、香澄が帰ると聞いて、あわてて出てきた。

「先生、これ、頂き物ですが、よかつたらどうぞ」

と差し出してくれたのは、大きいメロンだった。お中元にこれで6個目が送られてきたのだ。香澄は、これからデートなのにちょっと重たいなと思ったが、

「ありがとうございます」

と受け取った。武史は

「そんなもの迷惑だよ、重いのに。」

と言ったが、香澄は丁寧にお礼を言って木下家を後にした。その時、木下家の電話が鳴り、

「武史、聡くんよ」

と母が言くと、武史は顔をしかめながら電話に出た。

加納刑事はあれからひとつも事件の情報がないので、もう一回見直しをしたいと思っていた。あのカローラの持ち主は関田純。あの日は弟に売ったから、使っていないということだった。弟は友達と勉強していたと報告があり、その友達も一緒だと言っていた。関田純は怪しいようには見えなかった。弟は受験勉強に忙しいと言っていた。白木敦夫も一緒だと証明していた。白木の家では、母親が刑事が来たので怒っていた。

「うちの子は受験生なんですから、変な噂が立つと困ります。この子は友達と一緒に勉強してました」

と、お母さんがまくしたてるので、仕方なく帰ってきた。でも、関田が来た時間も、帰った時間も母親は起きてるから知っているといった。まあ、白いカローラということしかわからないんだから、違つかと加納刑事は思った。

加納は京都市警の捜査がだんだん規模が小さくなっていくのがた

まらなかった。あの残虐な殺され方をしたのに、犯人はのうのと暮らしているのかと思うと、中野の親子に申し訳ないと思っていた。

省吾は京都駅に降り立ち、改札口を見ると香澄がいた。大きなメロンを持っている。

「どうしたの、そのメロン」

「これは、家庭教師のお宅からもらったの。今、木下さんのところでバイトしてるの」

「ああ、あそこで。途中で先生がかわって、武史君も大変だったみたいだね」

「そうよ、いい子なの。愛子のことを慕っていて、今も思い出すと元気がなくなるの」

「そうか、姉を忘れないというのがうれしいな」

二人は手をつなぎ、河原町に食事に出かけた。父も落ち着いたから、もう復学できるということだった。4か月休んだがそれまでの単位もしっかり取ってるので、学校は事情を了解してくれて留年にはならないということだった。

レストランの入り口に百合がいた。

「あらあ、百合。今日はコンパニオンのバイト？」

「そうよ、彩加も、ママも」

二人は後から来るといふ。この頃はコンパニオンサービスが軌道に乗って、百合も就職はせず、このサービス業を立ち上げるといふ。大川ママより百合のほうが客の扱いがうまいので、自分の名前をとってリリーサービスという会社を作るといふ。大川ママが知ったら、また、大変なことになるだろう。

「あの洋子ちゃん、最初は痛い目にあっただけど、今はできちゃった結婚するって」

「うそ、私聞いてないわよ」

同じ下宿の香澄が知らないで、百合が知っているのが悲しかった。百合は

「あの仁君が、浮気しちゃったから、彼の下宿の人と仲良くなっちゃたみたいよ」

洋子はいつも相手が違うといってたけど、仁君とはうまく行っていると思っていた。

百合と別れて、省吾とレストランに入ると、二人はどちらからともなく

「会いたかった」

と呟いた。香澄も省吾も幸せだった。この日、二人は初めて結ばれた。みんなから奥手といわれていたけど、香澄は省吾が初めての相手でよかったと思った。省吾も初めてだった。ぎこちない二人だったが、お互い愛しい気持がつのって、なかなかうまくいかなかった。でも省吾が2度目に挑戦し、やがて一つになったとき、香澄は涙がこぼれて仕方がなかった。

「痛かった？」

「いいの、省吾が好き」

その声を聞くと、省吾はやさしく引き寄せた。

聡は武史に電話をかけてきた。

「おい、刑事が動いてる」

聡の話に武史は膝がぐくぐ震えてきた。愛子のことをかき消すように、勉強にまい進した。愛子のことを反省すればするほど勉強に打ち込んだ。実際、あんなことを自分がしたことが信じられなかった。聡は敦夫と二人で勉強していたという話にしたという。敦夫の母親はいつも寝てしまってるから、勉強してたっていうと、見てもいないのに証明すると言ったそう。敦夫の母親らしい。ここにも来るだろうか。愛子が死んだ翌日は来たけど、武史はショックで寝込んでいたのでベッドで会った。魅かれていた先生が亡くなって、同情してくれた。今度はそうはいかない。愛子のあの死んだ時の顔が浮かんで、武史は吐きそうになった。あのストッキングが見つかったら終わりだ。

あのメンバーで会うのはやめることにした。それぞれ、受験にまっしぐらな様子に見せないと怪しまれる。そう約束して電話を切った。油断大敵だ。

「俺たちは人間失格だ。」

そうつぶやくと、武史は志望校の学校を決めた。京都から出ることにした。

香澄は、就職活動をして、地元から出ることを考えていた。両親もやっと許してくれた。ひとりだけ帰れというのかわいそうということになったのだ。省吾は早く就職して、結婚しようと言ってくれた。でも、彼はまだ二十歳、きつと好きな人が出てくるということいつもふくれていた。省吾は好きだけど、今から結婚という言葉で締め付けるのはつらい気がした。

住みたいのはもちろん京都。省吾のそばを離れられない。自分でも矛盾してると思う。省吾にはかつこよく言っても、香澄もしがみついている。年下の彼は損だなあと、洋子が羨ましかった。洋子は厚木洋子になると話してた。

洋子は赤石寮を出て行った。厚木は学者肌で、そんな人と結ばれるとはだれも予想してなかった。洋子は学生結婚で、産んでから写真ぐらい取るかもと、幸せそうだった。学校はいずれ辞めるという話だった。

「あまり勉強も好きじゃないし。子育てをしつかりするつもりだつて」

「へえ、洋子ちゃんがねえ、頑張つてね。若いママになるのね」

みんなで、洋子の幸せを祈った。

香澄は家庭教師の家からすごい額の卒業祝いをもらった。武史は家族みんなが驚くほど勉強して、東京の有名私立大に入った。香澄はとても感謝されて、盛大な武史の合格祝いのパーティーに呼ばれた。

武史の友達もみんな合格したという。真面目な子ばかりなんだと、

香澄は思っていた。

「おめでとう、武史君。すごいねえ。あれよあれよと点数が上がっていったもんね」

「ありがとうございます。先生のおかげです」

武史は本当にまじめにやった。あの事件を忘れて。しかし、この頃聡の電話が多いのが気になった。大学入試という目的が達成されると、もう先が見えなくなったのか、聡は落ち着かなくなっていた。聡はひとりになったら、あの加納刑事にしゃべりそうで心配だった。今はまだ高校生だが、いずれ二十歳を超えると罪は重い。あいつは弱いからなあと武史はつぶやいた。

敦夫と周平は県外の大学だが、聡は京都だ。ここにいたら危ないって言ったけど、京都がいいって話を聞かなかった。周囲は武史が真面目で、勉強ばかりしたと証明してくれるだろう。家庭教師は信じている。中野愛子の弟も。

香澄は無事、京都の下着メーカーに就職できた。かなり、有名で親も名の通った企業だから応援してくれた。省吾も素直に

「よかったねえ、これで京都で続けて住めるね」

と喜んでくれた。一緒に住もうと言ってくれたけど、やはり距離を置いて暮したほうがいいと、赤石寮にそのまま住むことにした。赤石はとても喜んで、

「あなたがそのまま住んでくれたから、いやな噂もすぐ消えて空き室にならなかった。ありがとう」

「そんな、赤石さん。こちらこそ卒業しても住まわせてもらうことになって、よろしく願います」

彩加は百合とともにコンパニオンの仕事を手伝っていた。

大学を卒業して3年過ぎたころ、コンパニオンサービスの仕事に、大学生の集まりがあった。

第5章

第5章

リリースサービスのコンパニオンは評判が良かった。百合と彩加は自分たちが築いてきた女子大生による素人っぽい雰囲気と、大学生ということで少しは知的な部分も感じるということが、結構面白がられたのだ。昭和50年代のこのころは、まだまだ大学生という響きに値段がついたころだった。

そんな中、高校時代の同窓会の集まりがあるということで、百合のところに依頼があった。今は21の若者たちだ。こういうのは以前悪酔いがあつて、大川ママも嫌がつていた。助けに行ったこともある。しかし、これがうまくいくと若い集まりがコンパ気分でも使ってもらえる。百合は彩加としばらく考えて、二人が参加して若い子を見張りながらやることにした。

メンバーは10人くらいということで、もうそろそろ就職活動も始めようかという時期なので悪さもそうしないだろうと二人は考えていた。

場所は二条城近くのホテルだった。幹事は関田聡。

聡は真面目に1回生では勉強しようとした。しかし、周りが華やかな学生が多いので、あつという間に遊びに夢中になった。今回もこういう女子大生のコンパニオンなら、あとで遊びにも誘えるという魂胆だった。周平や敦夫もきたが、木下武史が久しぶりに来るというので、聡はうれしかった。あの事件以来、武史は避けているように会うことを嫌がった。他のメンバーも県外に行き、聡はつまらなかった。あんなに仲良くつるんだのに、あの事件でも捕まらずにきたのにと勝手な考えをしていた。

他の高校の時の仲間も呼ばないと、きつと武史は来ないと思った

から、あと5、6人に声をかけてみんなで集まることにしたのだ。みんな会えばまた元通りになると、聡は期待していた。

開始は7時。百合は彩加とあと二人を連れてホテルに向かった。聡はずいぶん早くから来たようで、張り切っていた。25歳の社長と聞いて、百合にも興味津津の様子だった。彩加は、

「危ない感じね、あの僕」

と、百合に耳打ちした。百合は軽くうなずいて、

「気を引き締めてやろうね」

と答えた。連れてきた女子大生はかつこいい大学生が多いと浮かれていて、二人は甘く見たらだめとたしなめた。

料理はバイキングで、若者ばかりだから自分たちで適当に入れていた。みんな行儀もよく彩加も百合もちよつと驚いた。特に武史、周平、敦夫は女の子にはクールな感じすらした。他の男は結構騒いでいたが、それでも会話で楽しんでいるようだった。

「おい、久しぶりなんだから、これから女の子もつれてどこかへ行かないか」

と聡が声をかけた。しかし、武史は

「いや、俺は帰るよ。周平や敦夫は行けば？」

「俺たちも明日は大学があるから、もういいよ」

「お前たち、こんなに集まることなかったのに、それはないだろう」と、聡は酔ってきたようだった。百合と彩加は

「お兄さんたち、私たちは今日は1次会だけなので、2次会は残念だけど行けません」

そういうと、他のメンバーも

「きれいなお姉さんがいかなければ、今日はもうお開きだな。聡、2次会はみんなで飲みに行こうよ」

「いや、俺は武史と飲むんだ」

と聡は聞かない。

武史は苦笑いしながら、

「わかった、おい、2人で飲もう。ここの8階にバーがある」

そう言われて、聡はふらつきながらも、武史に抱きついてきた。

「そうだよ、俺達親友だもんね」

「はいはい、その通り」

百合と彩加たちは、武史に

「大丈夫ですか？車呼びましようか」

「いや、いいです。俺が連れて帰るから」

百合は今日の支払いをはじめにもらっておいてよかったと、つくづく思っていた。若い子たちはそこで今日の給料をもらって、他の学生と飲みに行くことになった。あれだけ言ったのと思ったが、個人的な付き合いまではだめとはいえない。

百合は武史がしっかりしているので、任せて帰ることにした。

8階のバーでは、聡は泣いていた。

「おいおい、泣き上戸なのか、しょうがないなあ」

武史は笑いながら聡の肩をゆすった。今まで確かに聡を避けていた。こいつは弱いからしゃべってしまいそうで怖かった。今日は楽しく飲んでいたが、酔っ払ってみんなに何か言うのではと、敦夫も周平もドキドキしていただろう。

そうなるのがいやで、誰もあの時の仲間で会うことを提案しなかった。

あれ以来、どこかで女性に触れることも怖かったのだ。自分たちがしたことに、自分たちで怯えていたのだ。異様な興奮とあの目。口には出さなかったが、高校生の考えなしの行動に、今重圧がかかっているのだ。情けないことだ。

「聡、もう飲まないで帰るか」

「いや、飲むぞ、今日は。とことん飲む」

バーテンにウーロンハイを注文した。もちろんウーロン多めで。

「武史、武史、俺を避けないでくれよ」

「誰も避けちゃいないさ。だからこうやって飲むんだろ」

「違うよ、今日はみんながいたからだ、一人だったら来ないだろ」

「……」

それには答えずにウーロンハイを飲んだ。聡は酒を飲まずに水を飲み干すところだった。

「武史、この頃、俺は独りぼっちだ。敦夫も周平も県外に行ってしまった。お前も。俺はここに残ったが、最近は忘れるよう努力している。女の子とも遊んだ。だが、ときどき無性に怖くなる」

「もうよせ、聡。酔ってるよ、お前は」

「あの先生が俺を見つめるんだ、どの女の子と遊んでいても。女の子の顔がいつの間にか、あの先生に変わるんだよ」

「よせ、おれは帰る」

武史は立ち上がりながら言った。聡はその武史の手をつかみながら「あんなに楽しかった仲間なのに、こんなに会えなくて、おれたちはどうしちゃったのかな」

武史は

「ずっと罪を背負っていくしかないさ」

と言いたかったが、武史は聡を連れて帰ることにした。岡山に帰ったら、愛子の墓に行くことにしようと思史は考えていた。

でも、墓に行ったところで許されることではない。4人のしたことは決して。あの省吾も武史たちがしたとわかればどんなに猛り狂うか。そして香澄も。

「聡、俺たちは昔のようにはなれないし、なっちゃいけないんだよ」

「どうしてだよ、もっと楽しみたいよ。まだ21だよ、俺たち」

「だが、そんな年齢の人の人生をどうしたよ、俺たちは。そんなにやすやすと幸せにはなれないよ」

「くそ、ほんとに馬鹿だったよ、なあ」

頭を抱えて泣く聡を、どうするわけでもなく武史はつぶやいた。

「俺たちは馬鹿者さ。どうしようもないほど」

加納刑事は相変わらず暑さの中、3年前の綴りを読み返していた。今、この事件に関わっているものはわずかな人数だけ。加納ですら

他の事件に追われているときは忘れていた。あれから3年もたっているのに、事件は暗礁に乗り上げてしまっていた。しかし、もうそろそろ犯人たちが安心して動き出すと思っていた。ほとぼりがさめたら、用心が消えていく。きっとあの犯人たちも動き出すにちがいない。そう考えていた。そんなとき、中野愛子の弟が訪ねてきた。省吾だった。

「こんにちわ、お忙しいところをすみません。」

「いやあ、元気かい。」

二人は思わず目を見合わせ握手をした。

あの時も立派な青年と思ったが、今はすっかりした風貌に、まぶしさを感じるほどだった。就職して教師になったという。

「岡山でしてるの？」

「いいえ、こちらでしています。何だか地元だと姉のことを忘れてしまいそうで」

「すまん、まだ見つけれなくて」

加納は心底申し訳ない思いがしていた。省吾は忘れられてしまわないかと心配なのだ、警察の捜査を待っているのだ。

「いえ、仕方がありません。でも、僕もなんか見つけれないから、こちらで仕事をしているうちに、手がかりだけでも見つけれられるかと思つて。」

「そうか、ありがたい。頼むよ」

「こちらこそ、加納さんだけが頼りですから、お願いします」

「あのう、時効があるのでしょ、この事件にも」

「うん、しかし、そんなことはさせないから」

「是非、お願いします」

暑い中やってきた省吾には、きっと犯人を見つけてみせると誓ったが、実際のところ、何にも手がかりはなかった。

上野香澄はもうそろそろ、省吾が結婚を決めてくれないかと思つていた。26歳になって周りもだいたいそんな話が出てきた。以前は

口にしていた結婚も、今は省吾がまだ教師になって日が浅いし、若いから急ぐ気配はない。考えていないとは思わないが、なんだか寂しい。姉があんな風に亡くなって、自分だけが幸せになるのは考えたくないのかもしれない。だが、香澄は……

香澄は八坂神社の近くの取引先に出かけた後、久しぶりに清水に行ってみようと、坂を上っていた。すると、

「香澄先生」

と声をかけられた。振り向くと、木下武史だった。

「まあ、武史君、久しぶりねえ」

まぶしいほど、白いポロシャツが似合っていた。高校卒業以来だった。

「ええ、どうしてここに？ いまさら観光でもないでしょ、先生」

「まあね、でも清水を見るのはこれで2回目。大学時代は興味なかったし」

「そうか、ご一緒してもいいですか？」

「もちろん、ハンサムな人と一緒だと鼻が高いわ」

二人は並んで歩きながら、過ぎた年月をあつという間に感じさせなくなっていた。武史は賢く人の話を聞きながら、自分のこともぼつぼつ話してくれた。大学の様子や今住んでいるところなど。香澄はいいなと思う男は、みんな年下だなと思った。

「先生、こちらに住んでいたんですね。」

「そうよ、こちらで就職もして、今も同じ所に住んでるの」

「そうですか、僕も来年は就職ですから、迷っているところです」

二人は取り留めもなく話しながら、清水の景色を楽しんだ。ゆっくりと散策しているところを省吾が見たら少しはやくもちを妬くだろうかと香澄は考えた。武史と歩きながら話すのは楽しかった。大人の男としても魅力的だなと思った。香澄はいけないいけないと首を振りながら打ち消した。

「先生、また、会ってもらえますか？ 僕は日曜日に岡山に帰ります。土曜の夜はだめですか？」

「いいわよ、土曜ね。仕事があるから、7時でいいかな」

「はい、では、7時に河原町の高島屋前で」

笑顔で去っていく武史を見つめながら、香澄は省吾の顔が脳裏をかすめたが

「教え子だもの、いいわよね、これぐらい」

と、つぶやいた。

第6章

第6章

今井理恵は大阪のアパレル業界で働いていた。あの赤石寮からは遠いということもあり、高槻にアパートを借りていた。今は彼もできて、ときどきアパートに泊まっていく仲になった。彼は28歳の同僚だ。

入社してすぐの歓迎会で、幹事をしていた大野牧夫。彼は同じ京都の大学出身だった。気があつてすぐに打ち解けたし、歓迎会の日もやさしく気を使ってくれた。今までまじめとしか言いようのない理恵だったが、あの事件以来、自分を守ってくれる人がいたらどんなにいいだろうかと思っていた。大学時代にも言い寄ってくる人もいたが、なんか線の細い人ばかりで、守ってくれそうにはなかった。でも、大野は野球部出身で、背が高く、気安く誰とでも話ができ、上司の受けもよかった。大野はよく働き、明るい男で、女性社員はみな狙っていた。でも、今井のまじめなところに惹かれたと大野は語った。

最初のデートも東寺、次は樟葉、となんというここのないチマチマした場所ばかり。それでも楽しく過ごしていくうちに、高槻のアパートまで送ってもらい、部屋に上がってもらった。大野は理恵との結婚を望んでいたし、理恵も待ち望んでいたはずだった。だが、やさしいキスの後、のしかかってきたら、思わずはねのけてしまった。忌まわしい事件を連想したのだ。あの時は頭を殴られ抱えられて車に乗せられていくところだった。だから、まるつきり状況が違うのに。

あまりのことに驚き、大野はどうしていいかわからないような顔をして、理恵を見つめた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……私……私……この傷を見て」

頭には、あの時の15針の痕。髪の毛でよく見えないが、確かにある傷痕。

泣きながら語る理恵の話に、激しい犯人への怒りを感じながら、「いいよ、あせらない、君の気持ちが溶けていくまで待つよ」

と言いながら肩を抱く牧夫に、理恵は本当に安らぎを覚えた。少しずつ、少しずつ二人は距離を縮め、半年後に結ばれた。そして、来月には結納。上司に仲人をお願いして小さな結婚式場で上げることにした。6月のジューンブライト。理恵の両親も三男の牧夫を喜んで、いた、牧夫の兵庫の父もとて理恵を気に入ってくれた。この結婚を誰もが喜び、祝ってくれた。

関田純は友人に結婚すると打ち明けられた。今日はその結婚式の司会を頼まれ、友人と彼女と飲むつもりだったから、暇な弟を運転手として連れてきた。

彼女は落ち着いた感じで、受け答えも賢そうだった。二人の恋愛の馴れ初めやエピソードを聞き、面白く司会を進められるようにまとめていた。弟の聡は、三人の邪魔をしないように静かに座っていた。やがて、彼女が式では発表しないでねと言いながら本当に好きになった理由を打ち明けてくれた。

途端に、聡は飲んでいたコーヒークップを落としそうになった。

「すみません」

と言いながら、トイレに立った。

あの女性があ那时的女。聡は思い出していた。

『二回目を企てて襲って、怪我をさせた彼女だ。顔は見られていない。でも、あの頭の傷は俺たちだ。』

誰も知らないことだ。彼女はあの日のことを決して忘れないだろう。俺は、俺は、とんでもない野郎だ。兄も知らない。だが、俺は自分のしたことから逃れられない。今になって、あれを蒸し返されるとは。知らんぷりしていればいいんだ。あの傷……ほんとにばれないだろうか』

いつまでも帰ってこない弟を心配して、純がやってきた。

「おい、大丈夫か。顔色悪いぞ。運転はもういいから、家へ帰れ。俺はタクシーで帰るから。」

「うん、悪い、なんか風邪でも引いたのかな。吐いちゃったよ」

「運転できるか？置いていくか、車？」

「大丈夫、ゆっくり帰るよ。大野さんによろしく言ってくれよ」

「わかった。しょうがないなあ」

純はやさしく弟に声をかけて、席に戻った。聡はゆっくり歩きながら、店の玄関に出た。すると、

「聡さん」

と呼ばれ、振り向くと理恵がいた。膝が震えるのを隠せないほどだった。

「大丈夫？私がタクシーをひらつてあげる」

そういうと、理恵は聡の腕を支え、タクシー乗り場に連れて行った。タクシーの運転手にも、具合の悪い人だからと告げ、タクシー代も聡のポケットに突っ込んだ。顔はあげられなかった。もう、消えてしまいたかった。タクシーに乗ると、聡は声をあげて泣き出した。運転手は

「大丈夫ですか？お客さん」

といったが、聡は気にするなと手を振った。自分は人間失格だ…。

加納刑事はDNA鑑定というものが、やがて事件をもつと飛躍的に解決すると思っていた。今はまだ、二千人に一人くらいだが、いずれもつと正確になるはずだ。血液型もわかっている。あの時の4人。いずれ捕まえてやる。今日は中野愛子の墓参りに行くつもりだ。命日だった。

岡山駅から車で20分ほどの所に、愛子の墓はあった。省吾は日曜日に行くといってたが、父の具合が悪くなって、病院へ行くことになった。加納は花を持っていた。途中、ひとりの青年に会った。彼は墓参りから帰るところだった。帽子をかぶっていて、顔は見え

なかった。しかし、愛子の墓には、今来たような線香と花が供えられていた。

「誰だろう？」

あわてて追いかけたが、もうどこにもいなかった。誰なんだ、加納刑事は今までに会っていないか、顔を見ていないのが悔やまれた。愛子の友達か、省吾の知り合いか。親戚か、それとも…。

岡山の病院を訪ねると、省吾が上野香澄といた。父親はかなり悪くて今日が峠という。そんなときに申し訳ないが、

「実は、今日お墓で青年に会ったんです」

「えっ、青年。誰だろう」

すると、香澄は

「それは武史君よ。昨日墓参りしたいって言われて。場所を教えてくれた」

「じゃ、香澄と一緒に来たのかい？」

ちよつと、うろたえながら、香澄は

「ええ、さっき言おうとしたけど、忘れてた」

加納刑事は、メモをとりながら、

「武史君っていうのは、誰ですか？」

「姉が家庭教師をしていた時の教え子です。香澄もそのあとを引き継いだので、教え子にあたります」

「そうですか、家庭教師ねえ」

加納刑事は、何かを思い出すような感じで、メモをやめた。

すると、急に病室の扉が開き、

「息子さん、お父さんが」

と、看護師が呼んだ。3人であわてて病室に入ると、父親が静かに息を引き取っていた。

「父さん、母さんと姉さんのところへ、やっと行けたねえ。」

と省吾はつぶやいた。香澄は省吾の肩に泣いてすごった。加納は、

「中野さん、すみません。必ず犯人を見つけて報告します」

とはつきりと誓った。

第7章

第7章

香澄は悩んでいた。省吾はこのところ、父親の葬儀とかで忙しく、香澄はまだ妻でもないから出しゃばるわけにもいかず、何だか寂しくてたまらなかった。理恵も結婚を決めたという話が伝わってきて、焦らないと言えば嘘になる。年下の彼はこういうときに損だなあとつい打算的になる自分も嫌いだった。

百合から電話で、久しぶりに会わないかと言ってきたので、今日は河原町で待ち合わせすることにした。彼女はこの仕事が軌道に乗っていて、同じ年でありながら、香澄の何倍も稼いでいて、京都にマンションを買ったという。

「どうですか、社長業は」

「まあね、いろいろあるけど、私に向いているみたいよ。この仕事」

「そうね、そう見えるわ。なんか板についてきたわよ」

「ふふふ、悪いけど、たばこ吸っていい？」

「平気よ。ところでどうしたの」

煙草をおいしそうに吸うと、百合は

「石田さんって覚えてる？」

「ええ、あの社長でしょ。どうしたの、それが」

「うん、相変わらずいい人よ。よくうちのサービス使ってくれるし、客層もいいし」

「そうなの、あの人はほんとに紳士ね」

「そうよ、そこをお願いがあるの」

煙草を消して、改まって香澄を見つめながら

「あのね、石田さんが九州の食品会社の支店を京都に出すんですって」

「わあ、すごい。やり手だったのね。仕事もできるのね」

「そこで、そのパーティーに、あなたを呼びたいっていうのよ」

「えっ、それはどうも無理みたいよ、だって私就職してるし。会社はアルバイト禁止だし」

「うん、だからそう言ったんだけど。あなたのこととても気に入っていて、あなたみたいな子を雇いたいっていうのが本音みたいなの」
「そう言っても、私も正社員だしなあ。今さらよその会社に入って、新人からやるのはしんどいなあ」

「ねえ、それなら、とりあえず会ってあげて。私の顔を立てて」

「パーティーでなく？」

「うん、それでいいから。食事だけでも」

「わかった。いいわよ」

百合は喜んで連絡をして、日曜日の夜に会うことになった。

石田社長はホテルのロビーで新聞を読んでいた。香澄は鼻眼鏡で読む姿に微笑みながら

「社長さん」

と声をかけた。

「ああ、よく来てくれたねえ。百合ママに無理言っただんだ」

「私もお会いしたかったから、よかったです」

「ここのラウンジを予約したよ。おいしいんだ、ここのお肉」

「わあ、うれしい。給料前ですからお肉は食べてません」

「ははは、お安い御用だ」

石田は上機嫌で、京都の仕事について話していた。すっかり聞き役に回っていた香澄は、その話自体が面白く、お世辞でなく本当に社長はすごいなあと思っていた。そんな香澄の聞き方に社長は満足しているようだった。

「やっぱり、香澄ちゃんはすごいよ。私をこんなにほめてくれるなんて。気分がいいよ」

「いえいえ、本当に立派です。京都の会社もきつとうまくいくと思いますよ」

「それでだねえ、その会社で働いてほしいんだよ」

「でも、私はもう勤めていて」

「聞いているよ。でも、君の仕事をその会社は評価しているかい。」

「それはない。私は毎日どれぐらいどこに収めているかを調べているぐらいで、私のやりたかった企画からは程遠い。返事に困っていると、」

「僕は君の話の聞き方や、今まで出会ったどの女性よりうちの会社にはしい人材と想っているんだ。京都はうちの会社の商品を全国に売り出すための拠点にしたいんだ。そこで、企画マネージャーのような仕事をしてほしいんだ。給料も今のところよりは出せると思うよ」

「なんか突然のことで、しかも私のようなものにそんな仕事は可能でしょうか。まだひよっこですから」

「これからは、頭が固いのはだめさ。感覚でこれが売れるとか、そういう部分がほしいんだよ。普通感覚が」

「そうですか、2、3日お時間もらえませんか」

「いいよ、だけど、前向きに考えてくれよ」

「はい、わかりました」

それから一切仕事の話をせずに、おいしいステーキを食べて、お酒を飲んだが石田は相変わらず酒癖も良かった。こういう人は世の中にどれぐらいいるんだろうか。この人が20歳若かったらなあ、と思わずにはいられなかった。

加納は朝から武史を探していた。岡山の大学で勉強をしているって、住所は上野香澄から聞いた。とにかくどんな生活振りか一日見ってみることにした。学生アパートの2階に住んでいて、大家さんもよくできた学生さんと手放しでほめていた。家から何か送られてくると、必ず大家さんのところに持って来てくれるということだった。挨拶もして当番の掃除もきちんとするのは、このアパートでは彼だけという行儀のよさに驚いた。

武史は以前会ったときは、顔色の悪い暗い少年だった。だが、どっちが本人か。生まれ変わったかと思えるくらいの様子にひっかかるものがあつた。いつも近くの喫茶店でモーニングを食べてから、大学に行っているというので、その喫茶店に行ってみた。喫茶エデンは古くからクラシック音楽を流し、少し値段が高いが、コーヒーの味も良かった。マスターは

「あの学生さんは、本当に静かな勉強家で、暇なときはここが落ち着くと言つてよく来てくれます」

ここでも、武史の評判は良かった。そこで、

「彼女はいませんが、そんな青年ならもてるだろうなあ」

「私もそう思いますが、彼女とお見えになったことはありません。そんな人が、この間、初めて連れてきたんでびっくりしました」

「どんな人でしたか」

「いや、普通のOLさんに見えました。ああ、確か先生つて言つてましたよ」

香澄さんが、一緒に来たのは。そう言つてたなあと思ひだした。

「他には誰も？」

「そうですね、ああ男の人と来ました。同級生つて紹介してくれました。京都の高校の」

「いつですか？」

「つい、4日ほど前です。ずいぶん顔色の悪い人でしたよ。同じ年には見えなかったですよ、やせてるし」

「なんて呼んでましたか、その人のこと」

「うーん、覚えてないです。」

加納刑事はその同級生に会つてみたかった。誰なんだろうか。木下武史、そして同級生。

4日前、エデンに来たのは聡だった。聡は兄の友人の結婚相手があの今井理恵だと報告に来たのだった。

「そんなことあるのかと、ほんとに驚いたよ。それ以来眠れないん

だ」

「だけど、お前がおたおたすると、変に思われるぞ」

「わかってる、でも怖いんだよ。これから一生こんな思いをするなんて」

聡は顔色が悪く、睡眠不足で頭痛もひどいと言っていた。

「こんなことになるなんてあの頃は思わなかった…」

下を向いて顔をあげずに聡は言った。

「聡、お前、病院へ行ったほうがいいよ」

「誰が行ける？ 病院で聞かれてどう答えるんだよ。人を殺したり、傷つけてるって」

「しっ、でかいよ、声が」

確かにそうだ。相談できる人なんてどこにもいない。でも、こんなことが続いたら、聡はきつと頭がおかしくなっただけかもしれない。でも、こんなことじゃあ、聡はきつと頭がおかしくなっただけかもしれない。人間失格でも、ここまで見つからなかったら、逃げてしまいたいと思うのは仕方がない。考える自分に、嫌気がした。だが、聡はこんなにも弱かったのか。こうやってくること自体がよくない。一緒にいてはだめだ。早いうちに何とかしないと武史は焦って来た。

第8章

第8章

武史は聡と逢った夜、眠れなかった。

『気持ちを入れ替えて、真面目に生きてきた。あの事件を起こしてから。でも、そんな自分の思い通りには人生は生きれないんだ。学校も家族もみんなが驚くほど頑張ってきた。先生も喜んでくれた。しかし、こんな中途半端な時期に捕まるのはいやだ。勝手な言い分とは思うが、愛子先生にも悪いと思っている。心底から。でも、今は……じゃいつならいいんだ？ 本当は自分も弱虫で、聡のことを責めることはできない。でも、あの調子なら、きつともう警察の取り調べにかかったら、すぐに自供してしまうだろう。でも、ウロウロするのもきつと目立つ。加納とか言う刑事が、墓にも来ていた。あいつはあきらめないタイプだ。きつと、俺のことも調べなおす気にいるに違いない。聡、しっかりしてくれと祈るしかないか、それとも、聡を……』

省吾は父の葬儀を終えて、京都に帰ってきた。若いのに葬儀ばかりをしてきたようであまりない。こんな目にあうのも、あの殺人者のせいだと思っていた。省吾はは小学校の教師という立場であるが、犯人が分かったら生かしておけない気がする。警察が捕まえるか、自分が捕まえるか、ここに残ったのも犯人がのうのと暮らしているのが許せないからだ。省吾は犯人に見張つてるということを、アピールし続けなくてはと考えていた。加納を信じていないわけではないが、捜査の規模が小さくなっているのも事実だ。あの日の愛子の姿や、母の死、そして弱っていった父。みんな一生懸命に生きてきた家族だった。一人になったほうが、動きやすくなったのかもしれない。愛子の遺志だろうか。

省吾は香澄と会う予定だった。このところ連絡できずにいたが、昨日やっと電話できた。会社を辞めるかもしれないなんて、何があったんだろうか。堀川の喫茶店に香澄はすっきりとショートにした髪型で入ってきた。

「大変だったでしょ、もういいの？」

「うん、心配掛けたねえ。もう親父も天国でみんなと一緒にだから喜んでるよ」

「悲しいことね」

「ところで、会社どうしたの。何があったの」

「うん、どこから言えばいいのかな。私、食品会社の企画担当をやることになったの」

「えっ、もう決めてしまったの」

「そう、今日はこれから会社の祝賀パーティー」

「なんか一人で進んでいくんだね」

「ごめんね、でも、今回初めて認められて勤めるの。大事なことから悩んだのよ、でも、ひとりで決めないと、思っ。私の人生だから」

「そうか、そうだよな。君の人生だ、君の思う通りにやればいいよ」
「ありがとう、本当はね、あなたの奥さんになってつてずるいことばかり考えてたの。つまり逃げ道。でも、そんなことしてると自分の存在価値もないような気がして。あなたも縛ってしまいそうだし」
「ごめん、なんかやつぱり年上だって気がしてきたよ。けど、今日の香澄きれいだよ。忙しくなっても、デートしてくれるかい？」

「もちろんよ、でも、先生の仕事もたまってるでしょ？」

「そうでした、とんでもないほどね」

二人でいると幸せな時間。省吾は結婚に踏み切れないのは、姉の犯人を見つけることが一番で、香澄の人生について考えるところへはいかなかった。でも、こうやって自分のところから飛び立っていきそうな香澄を、引き留めることもできないと思った。

聡はふらふらと四条大宮の映画館に入り、古い邦画をみていた。

スクリーンに映るやくざを見るともなく、だがここで寝ることができた。聡はスクリーンでヒロインが泣きながら乱暴されるシーンで目が覚めた。その顔が愛子になったり、理恵になったり。怖くなつて映画館から飛び出てきた。その後ろには加納がいた。加納は聡の様子に何かをつかめそうな気がしていた。

聡は本屋に行き、パラパラといろんな雑誌に読むというより触っていた。その動きが、やがて1冊の文庫本を、ズボンのポケットに入れるのを加納は見逃さなかった。

「いけないよ、そんなこと、君」

と近づいて腕をつかんだ。聡は驚いて本を返した。加納はここで警察に突き出すのは得策じゃないと思った。聡はがくがくと震えていたが、加納に引つ張られるまま、外に出た。店主は気がつかないようだった。聡はうなだれたままだ。加納は近くの喫茶店に聡を連れて行った。

「どうしてあんなことをしたのかい？」

「わからない、なんかぼうつとしていて」

「寝不足かい、顔色が悪いよ」

「お巡りさんですか。交番に行くんでしょ」

「うん、僕もたまたま見つけたけど、君と話がしたくて、まず、名前は関田聡だね」

「はい、えっ、知っているんですか」

「ああ、前に会ったことあるよ」

「どこですか」

「君の家で。女性の傷害事件を調べてる時に」

聡の顔が引きつるのを、加納は目をそらさずに見た。

「どうして、そんなに驚いているの？」

「いえ、昔のことなのに…よく覚えているなあと思って」

「そうかい、刑事だからねえ、仕事柄覚えてるよ」

「…僕を見張ってたんですか？」

「いや、たまたまだよ。この近くまで別の捜査で来てたから」
「でも、これからどうするんですか？」

「この前、岡山に行ったよね。木下君に会いに」

「はい。岡山に遊びに行ったからついでに」

「木下君はどういう友達？」

「どうって、高校の同級生。親友だよ」

「そうかい、木下君は元気そうだった？」

「ああ、あいつは元気だよ」

「何で君は元気がないの？」

「そんなことないよ、今日は睡眠不足だからさ」

加納は今日はここまでで、あとはもう少し話を絞って後日聞こう
と思った。聡はふてくされたようで、もう答えなくなっていた。

弟の聡は、気持が落ち着かなくなり、言動もおかしいことがある。
ある。家族は心配して病院へ行くように勧めていたが、聡は頑として譲らなかった。前から落ち着いている弟ではなかったが、最近
は大学へも行けないようで、その精神状態が不安定で睡眠もとれて
いないことでほんとにおかしくなってしまうのではと、近くの心療内
科に純は出かけた。

弟を診せる前に自分が相談したかった。父も母も弟ばかりが親に
心配をかけると頭を悩ませていた。家での様子を話すと、医師は
「何か、とてもストレスを抱えているようですね。いつからひどく
なりましたか」

「そうですね、友達の結婚の打ち合わせに行った時に、もどした
ようで、それからですから半年くらいです」

「そのときに、何かあったんですか？」

「いやあ、覚えてないです。世間話をしていたと思うんですが」

「それは、どんな話だったんですか？」

「話の内容ですか、思い出せないなあ」

「その日からであれば、何かショックをつけるようなことだと想像

できますが」

「うーん、僕は結婚の司会をすることでよく聞いてなかったから。友達に聞いてみます」

本人を診ていないから薬は出してもらえなかった。けれど、兄の純は解決の光を感じることができた。弟の苦しみを救ってやりたかった。大野に話を聞いてみようと思った。理恵も思い出してくれるかもしれないと期待した。

第9章

第9章

大野は理恵と結婚をしていた。関田の弟が具合が悪いということで心配していた。特に理恵は、打ち合わせの時の聡の様子が、心配だったので、何か病気が進行しているのではとも思っていた。純からの知らせで、協力は惜しまないつもりでいた。二人の新居に純はやってきた。

いかにも新居らしく、家具も新しく、室内は白ですっきりとしていた。

「いらっしやい」

とにこやかに迎えてくれた理恵は、新妻らしくエプロン姿がかわいらしかった。大野も少しふつくらとして幸せ太りかと純は笑ってなかった。

「ところで、悪いな、弟がずいぶんとうつ状態になってしまって。病院も行きたがらないし、俺が代わりに医者に話を聞いてもらってるぐらいなんだ」

「心配だなあ、悩むタイプには昔は見えなかったよなあ」

「牧夫さん、そんな失礼よ」

「いやいや、本当にその通りなんだ。でも、大学に入り、家族みんなほつとしてたのに、そのころからだんだん変わってきちゃって」
「コーヒーを進めながら、あの時の会話を理恵は思い出そうとしていた。」

「理恵も俺も、式の司会をしてもらったことばかりしか頭になくて」
「ええ、そんな大した話はしていないと思うの。でも、頭の傷を見せたのは覚えてる」

「そうか、そういえば頭の傷を見せてからトイレにいったよなあ」
「だけど、あいつはそんなやわな奴じゃないよ」

純は昔ブランコから落ちて額をけがしたが、医者でも聡は痛がる兄の傷を縫うところをずっと見ていたんだからと語った。牧夫は「でも、あの話はひどいだよ。だって犯されそうになったんだし、鈍器で殴られてできた傷なんだから」

「そうか、聡の彼女がそんな目にあってるかもしれないな」

「そうよ、身近な人がそんな目にあつたのを聞いていたのかも」

純も大野夫婦も、聡をこれっぽっちも疑っていなかった。

純が家に帰ると、聡が寝ていた。聡はめっきりやせて、母親も食事を食べてくれないとこぼしていた。

「おい、飯は食えよ。おかゆにして食うか？」

首を振る聡に、純は大野夫婦の言葉を聞いてみた。

「お前、友達の誰かが、乱暴でもされたのか？」

大きく目を見開いて兄を見つめ、

「なんで、そんなこと言うんだ」

「いや、お前が具合が悪くなった時の話は、理恵さんの頭の傷だったから」

「わあー、あっちへ行けよ、行ってくれよ」

と、聡は悲鳴に近い声を出して、部屋から純を追い出した。純はやはり夫婦の予想は当たっていると思っていた。

聡はもう逃げ道がないと、布団の中で気が狂いそうになった。

『だめだ、もうだめだ。刑事も怪しんでるし、兄貴も。あの大野夫婦も。武史、俺は自信がない。ああ、誰か、助けて』

香澄は一生懸命働いていた。認められる喜びがこんなにも活力を与えるのかと、自分でもびつくりするほどだった。会社は12人だったがみんな若くて、石田社長の息子の剛がうまくまとめていた。剛は38歳で独身、というよりバツイチだった。

仕事ばかりで家庭を顧みないと妻に捨てられたんだと石田社長は話していた。石田は息子のことは言わなかった。京都の会社を立ち上げて、息子に任すなんてことは。でも、どうもそうらしい。香

澄は省吾とも時々会ってはいたが、二人の進む道は少しずつずれてきていると感じていた。きっと省吾もそうだろう。学校も忙しいし、お互い暇はなかった。それが、かえって二人を冷静に考えさせる時間をくれた。結婚というイベントをしたいと思っていたのかという気もしてきた。

そんなある日、赤石寮の前に武史がいた。

「あら、久しぶり。元気だった？」

「うん、もう就職活動が無事に終わって。決まったんだ」

「えっ、おめでとう。どこへ行くの？」

「製薬会社。このところ、化粧品も売り出してるって」

「ええっ、すごい。あなたはお兄さんと同じ医者になるかと思ってたら、血が怖いって、医学部受けなかったもんね」

「うん、まあね」

「それにしても立派よ。そのお知らせをわざわざ伝えに来てくれたの？」

「そうです、先生に」

「わかった、じゃ、今日はおごってあげる。近くの居酒屋で」

「うれしいなあ、来てよかったです」

武史は香澄のことが好きだった。香澄といればいろいろなことを忘れることができた。本当は聡の様子を見て帰ってきたのだった。明日聡に会う前に、香澄に会っておきたかった。

3時間近く飲んだ後、武史は送っていくつもりで香澄と並んで歩いていた。

「わーっ、やめてくれ、許してくれ」

と叫ぶ声が聞こえてきた。武史はひきつった。聡だ。香澄は神社で怒鳴っている男が武史の知り合いと聞いて、

「大丈夫？ あの人を送っていったほうがいいわよ。」

「そうするよ、ごめん」

というやいなや、武史は声のするほうへ走って行った。香澄は気になっただけでしばらく待っていいよかと思ったが、男二人のほうが落ち着

くかと、後ろを振り返りながら帰った。

「聡、俺だ、武史だ。しっかりしろ」

小さくなった聡の肩を抱きながら、武史は聡をおさえようとした。しかし、聡は武史のことがわからないのか

「ああ、やめてくれ、放せ、このやろっ」

と暴れて武史の手を振りほどこうとする。武史はこの聡がもう昔の聡ではないと知った。狂ってしまったんだ。

「おい、わかるか、武史だよ」

という声が涙でくぐもる。

『だが、これで俺は殺さなくて済む。聡に責任能力はない。助かった、これで誰にももうわからない。聡、お前は最高の親友だ』

第10章

第10章

加納刑事は、聡の証言が得られないということがわかった。

何しろ、精神科に入院してしまった聡に会った時、目の焦点が合わずにつぶやく姿にがく然とした。昨日も見舞いに武史がやってきたという。家族はがっくりと肩を落としていた。兄はせつせと弟の病室に通って、何か変化がないかとノートに記録していた。聡は兄が来ると機嫌がよく、体も動かそうとするが、他の人の呼び掛けにはうつろに見るだけだった。

関田聡が何らかを知っていると思っただけに、加納刑事のシヨックは相当なものだった。しかも、木下武史の安心したような落着きが腹立たしかった。

武史は落ち着いて過ごしていた。もう気をつけて動く必要はない。今までの努力は報われるんだと。就職も決まったし、これからは本当にしっかりと歩いていこうと考えていた。そして、愛する人と一緒に暮らすことができたらと、香澄の顔が頭に浮かんだ。今日は食事に誘うつもりだった。

香澄は出張で石田剛と東京にいた。昨日から九州物産展でうちの商品もブースを立ち上げることができたからだ。会場はにぎやかで、バブル景気を十分に表していた。飛ぶように商品が売れ、引き続き北海道でも行う観光フェアでも出店できるように決まった。香澄は確実に顧客を増やそうと、石田と企業を回った。どこも好反応で手ごたえがあった。

「この調子でいくと、先月より25パーセント増ですね」

「うん、やっと僕らの力で勝ち取ったもんな。今までは親父の力で広げてきたんだから」

「社長も喜んでくれますね」

「今日はみんなで飲みに行こう」

二人は意気揚々と、ブースのなかの社員と今日の打ち上げ場所を決めていた。新宿で盛り上がって、もうすっかり武史のことは忘れていた。明日は休日だから、いけいけムードで午前様まで飲んでいい。石田とホテルに帰って、それぞれ部屋をとりゆっくり休んでいた。

武史は赤石寮の前で待っていた。午後8時からずっと。夜中になっても。最初は事件でもと思ったが、忘れているのではと考えたときに少し顔が青ざめた。

「東京に出張だから、8時頃帰るわ」

と言っていただけ。ここで何時という話までは決めなかった。だが、武史はそれが約束と思っていた。ケータイのない時代、二人はやりとりなど出来なかった。心に一つ小さな穴があいたような気がした。

香澄は翌日、二日酔いの石田と二人で京都まで帰ってきた。駅で別れて赤石寮まで帰ると、武史がいた。

「え、えっ、武史君？ ひょっとして待ってたの？」

「おかえりなさい。いいんです。はつきりと約束したわけではなかったし」

「ごめんなさい、本当にごめんなさいね。私、仕事がつましく行ったから、つい、みんなでお祝いしてそのまま泊っちゃったから」

「いいんです。心配しないでください」

香澄は近くの喫茶店に誘おうとした。だが、武史はまた来るからと言って帰って行った。香澄はこういうことを続けていてはいけなのではと考え始めていた。彼も20歳を超えて立派な大人だ。いい加減な気持ちで飲みに行ったり、誘ったりはしてはいけない。いくら教え子と入っても、もう何年も前の話だ。あの一直線の若い気持が痛い。

武史は久しぶりに、引出しの奥から、愛子のストッキングを取り出していた。ベッドの上で。

春になり、省吾は異動で愛子の亡くなった近くの小学校に赴任が決まった。これも辛いものだったが、姉の気持ちがそうさせたのかとも思った。香澄とはなんとなく疎遠になっていた。

そんな省吾のもとに、久しぶりに香澄から連絡がきた。その声が震えているのが気になった。

「もしもし、香澄です。忙しいでしょう、ごめんね」

「いいよ、元気か。仕事は順調かい」

「ええ、うまくいつてる。認めてもらえてる」

「そうか、よかったなあ」

「うん、でも、困ったことがあつて」

「何だい？ 俺でもわかること？」

「会社に変な手紙が送られてくるの」

「何？ 手紙？」

「うん、活字だから筆跡もわかんないの。ただ、私のことをいろいろと書いてて」

「どんなこと？」

「あることないこと、でも、ところどころほんとなの」

「男漁りするとか、詐欺をするとか、でも、高校名とか、出身地があつて」

「心当たりは？」

「わからない。でも、怖くて。だんだん見られてる気になって」

「今、どこにいるの？」

「寮よ。休みは家にいたほうが安心で」

「わかった。今から行くよ」

「ごめんなさいね、誰にも相談できなくて。こんなことがあると、仕事にも影響があると困るし。信用がなくなりそうで」

30分ほどで赤石寮についた。もう、姉が死んで荷物を取りに来た時からきてない寮は、ずいぶん古い感じに汚れてきた。懐かしさが悲しい思い出だ。香澄は玄関で待っていた。ワイン色のセータ

「ジーパンがよく似合っていた。

「休みにごめんね」

「そんなに謝るなよ」

部屋は相変わらずだった。あまり色気がなく、でもすっきりと掃除もしていて、机にはその手紙が置いてあった。全部で3通。

どれも消印は、京都駅付近。このあたりに住むやつか。内容はただの嫌がらせ。だが、確かに実家のこと、家族のこと、大学のことなどところどころに見てるというメッセージがある。こういうのは気持ちが悪いし、恐ろしい。

会社に届くが、初めはいたずらくらいに思つて、誰にも言わなかった。前の会社とか、ひよっとしたらやつかみもあるかと思つた。ところが、この頃実家のこととか出てくると、前の会社ではそのことを知っている人はもう結婚してやめたから、あとの人は知らないはずと言つた。省吾は今の会社ではどうなのかと聞くと、みんなそんな話をする暇もないほど仕事に夢中だという。

「でも、一人だけ。違うと思うけど」

「誰だい、それ」

「木下君」

「まさか、武史君かい？」

「でも、この前、約束をすっぱかしてしまつて」

「それで、こんなことをするの？ 考えられないよ。彼がするなんて」

「そうねえ、違うわよねえ」

「彼ぐらいだよ、姉の墓参りをずつとしてくれるのは」

そう言われるとつらかった。あの武史君を疑うなんて。あれ以来、会つてもいないのだから。しかも、あの時も責めることもしなかった。あの痛いような一途な気持ち。怪しむほうがおかしい。

省吾は、しよげてしまった香澄に

「加納さんに言ってみたら？」

「刑事さん？ もう少し様子をみてからにする。もう来ないかもし

れないし」

「ともかく、気晴らしに飲みに行こう」

「そうね、久しぶりに会ってよかった」

「きれいになってびっくりだよ」

「今日はおごる。私のほうが金持ちだから」

やっと、気持がほぐれて、香澄は省吾にあってよかったと感じていた。久しぶりに省吾は手をつないでくれた。甘えてはいけないうちながら、つないだ手にあたたかさを覚えた。

第11章

第11章

その日、大野理恵は病院へ行った。

妊娠だった。牧夫が喜ぶ顔が目に見え。きっと、自分に似たら賢い子ができるって言うだろう。くすくす笑いながら、病院を出ようとしたときに、ここの精神科に聡が入院していることを思い出した。関田純が心配していたのに、結局入院することになって、本当に気の毒と思っていた。牧夫といつか見舞いに行こうと話していたが、今日はせつかくここまで来ているのだから、と玄関先で花を買い病院へ向かった。

ナースステーションで部屋を聞き、知人ということで一応本人に聞いてくると言われた。名前を告げてもあり分らないようだけどおとなしい患者さんだからと通してくれた。

聡は部屋の片隅で、スケッチブックを持って、車の絵を描いていた。

「聡君、こんにちわ」

花を持って近づいても無表情だった。聡は理恵の顔を見ても誰なのか興味もないようだった。看護師さんが、

「聡君、今日も車の絵なのね」

「カローラだよ。ぼくのだよ」

と、得意そうに話をしている。理恵はスケッチブックを覗いた。上手だ。前のページは、車の中も描いているという。そこには、車内のミラーのところに、大きなミッキーがぶら下がっていた。理恵は、ふらついて看護師さんがあわてて支えた。

「大丈夫ですか？」

「ええ、貧血です」

病室で聡はきょとんとしていたが、理恵はもう挨拶を言うことも

なく部屋を後にした。待合室でじっと座っていたが、このことをだれに伝えるか悩んでいた。あの日の忌まわしい記憶がよみがえってきたのだ。

『聡が具合の悪くなった日、そう、あの時に私が話したのはこの傷を見せたことからだった。自分がつけたからなのね。牧夫も純も知らないことだ。二人に言ったところでどうなるのだろう。親友同士なのに。でも、許せない。あの日の犯人は。他にもいたわ。助けてくれたのは香澄だった』

香澄は社内の噂を気にしていた。あの手紙が執拗に送られてくるから。省吾と相談した後、警察に言うほどではないと思っていたが、やはり帰りなど遅くなると怖いので加納に話をした。加納は近くを警らしてもらうように頼んでおくと言ってくれた。

「木下さんとは会いますか」

「武史君ですか？ いいえ」

「もう製薬会社に勤めていますね」

「ええ、優秀な社員ですよ、きっと」

「いつから会っていないんですか？」

「もう半年くらい」

あの約束をすっぱかしてからだ。武史を疑って、省吾に墓参りしてくれるのは武史だけって言われた。この悪意ある手紙が、武史のはずはない。

「でも、どうして武史君のことを？」

「いやあ、彼の友達が病気になるってね、高校の時の関田聡君。今入院しているんですよ。知ってるのかなあと思って」

「ああ、関田君。よく来てたわね、彼の家に。でも、何で入院なのかしら」

「どうも、精神科でしてね。いろいろストレスがあつてとご家族が言っていました」

「そうなんですか。武史君は知ってるのかしら？」

「さあ、それはどうですかねえ」

「加納さん、どうしてその人たちのことを御存じなの？ 何か調べてるんですか」

「昔ね、あの事件のころ、車に乗ってる若者を調べたときにちよつと」

「ああ、そうですね。聡君は車持ってたわね、優雅だっと思ったもの」

香澄は加納に礼を言つと、席に戻った。机には「大野理恵さんから電話がありました」とメモがあった。

早速電話をしたが、理恵は出かけているのか出なかった。出先からかけたようだった。

武史は後悔していた。腹を立てて、短気を起こしたら今までの生活が送れなくなる。あの時は何時間も待つて、氣持が募っていたところに香澄が酔って帰ってきた。でも、よく考えると大人げないし、あれで香澄が引いてしまったら、もう会うこともなくなってしまふ。それは避けたかった。無理やりでなくて自分に振り向いてほしいのだ。本気で香澄を想っているのだ。

武史は機会を窺っていた。さりげなく会えることを。省吾となら、安心するだろうと企んだ。

省吾の学校は現場から近くていやだった。しかし、香澄に近づくには彼からの援助が必要と思っていた。省吾は、放課後子供たちと元気に走り回る姿はいかにも若い先生らしかった。武史は遠くから見ていると、愛子の横顔と似ている省吾に懐かしさを感じていた。愛子はやさしい先生だった。すらっと伸びた足はきつと速かったに違いない。すると、誰が奪ったんだという声が聞こえたようで眼を伏せた。

「こんにちわ、お久しぶりです」

「ああ、武史君かあ。元氣そうだねえ。会社はどうだい」

「はい、慣れてきました。ついていくのに必死です」

「今日は休みなのかい？」

「ええ、昨日、残業があつて、今日は早く帰つていいつて」

二人は木陰に座りながら、武史の持つてきたジュースを飲んだ。

「どうしたの？ 今日」

「ええ、実は、愛子先生が生きてらつしやる時に、ここのお菓子が好きつて言つのを思い出して。仏前に供えてもらおうと持つてきたんです」

京都の有名な干菓子だ。姉は甘いものには目がなかったからと、省吾はありがたく受け取った。

「いつまでも、忘れないでいてくれるのは、本当にうれしいよ」

「そんなこと、あたりまえです。ところで、たまには飲みに行きませんか」

「そうだな、今日はいいのかい？」

「ええ、行きましょう」

「そうだ、香澄先生も呼ぶか」

「いいですね、来てくれるといいなあ」

省吾はこんなによつを疑うなんて、早く香澄に教えなくてはと考えていた。武史は満足そうにジュースを飲みほした。

第12章

第12章

省吾と武史は木屋町の居酒屋にいた。サラリーマンでにぎわっていたが、そこへ、香澄がやってきた。香澄の両手には仕事の書類がいっぱい、紙袋からはみ出そうだった。

「すごい荷物だねえ」

と、省吾は香澄から荷物を受け取りながら、席の隅に汚れないように置いた。武史も香澄におしほりを渡しながら、

「お久しぶりです」

とあいさつをした。いつもの武史だ。香澄は二人を見ながら

「どうしたの？ 二人で飲んでるなんて」

「うん、武史君が姉のお供えを持って来てくれたんだ。それで、ちよつと飲みに行こうかって話になって。先生をお呼びしたわけ」

「先生か、でも、本当によく気がつくわね、若いのにえらいわ」

「いやあ、そんなことないです。偶然、その店の近くにいたから」

3人は意気投合しながら、その店の飲み放題の制限時間ぎりぎりまで飲み続けた。いいご機嫌になった3人は、

「次いくぞー」

という省吾が続いて、武史も香澄もはいはいとついていった。2軒目は、省吾が先生方とよくいくスナックということで、小柄な感じのよいママがいた。40代後半かと思われるママは、髪を小さくまとめ、黒いセーターがよく似合っていた。

「あら、中野先生、いらつしゃい。皆さん先生ですか？」

「いえいえ、友達です。木下君と上野さん」

「まあ、ようこそ、きれいな方ね、それに素敵なハンサムさん」

「そうでしょう。みんなに水割りを」

「はい、今日は私がつけたお漬物があるわ」

小皿にそれぞれ違う種類の漬物が出てきた。ナス、きゅうり、白菜どれも浅漬けで彩りもきれいだ。

「おいしいな、こういうのがさっさと作れるといいですね」

香澄は感心しながら食べた。3人は本当に昔からの友達だったかのような錯覚に陥った。武史も香澄も、省吾もそれぞれの仕事上の悩みや不満、そしてうまくいった時のことなどいろいろ話ってきた。省吾は武史と香澄が仲良く話ができているのをみてうれしかった。武史を疑うなんて、香澄、間違つてると言いたかった。

武史がトイレに行くと、省吾は香澄に

「今日は3人で会えてよかったな」

「ホント、武史君とも久しぶりだったし、誤解して悪かったと思ってるの」

「さて、今日はこれでお開きにするか、送っていくよ。実は明日も会ってほしいんだ。今度は二人で」

「いいわよ、明日は休みだから」

武史は二人が会うことを聞いてしまった。酔いがさめていくようだった。

『仲がよくても、香澄と俺は恋人にはなれないのか』

省吾は上機嫌で

「あのう、ママ、お勘定は僕につけといて」

「えっ、いいの？」

香澄は省吾に聞くと、

「武史君にかっこいいところ見せたいのに、いいのなんて言うなよ」

「すみません、ごちそうになります」

3人は店を出ると、武史が

「僕のほうが近いから、送っていきます。省吾さん、安心してください」

「二人ともいいわよ、私もうタクシーで帰るから。二人でもっと飲んだら？」

「そうだな、もう1軒、武史君どうだい？」

「わかりました、行きましょう」

二人に見送られ、香澄はタクシーに乗った。省吾の話ってなんだろう。明日も会えるって何かいいことがあるかも思っていた。

3軒目は喫茶店だった。

もう飲むことはできない省吾が、武史と話がしたかったからだ。

「省吾さん、香澄さんと結婚されるんですか」

「うん、僕はそのつもりだよ。でも、彼女に言っていないけど」

「いいですね。香澄さんはやさしいし、一緒にいて楽しい人ですよ」

「うん、それに俺も随分と助けてもらったよ。いろいろあったから10年たたないうちに、家族全員が死んでしまうんだから」

「大変でしたね」

一瞬、武史に暗い影が差したのを省吾は気がつかなかった。

「この気持ちは香澄しか受け止めてもらえない気がしたよ。いつの時もあいつがいてくれたから」

武史は返事ができなかった。犯人の一人と分かったら、省吾はどう変わるだろう。殺されるかもしれない。話題を変えようと省吾は笑顔で

「武史君、君は恋人はいないの？」

「ええ、とてもとても、まだそこではないですよ」

「そうか、仕事が大変だろうから、営業はきついかい」

「そうですね、病院の先生に気に入られないとだめですから。省吾さん、こんなこと聞いていいかわからないけど」

「なんだい、なんでもいいよ。」

「もし、お姉さんの犯人が見つかったらどうしますか」

「うーん、この仕事をしていても、警察より早く見つけたら殺してしまいそうだ。憎いとか言う以前に、そいつは生きていては駄目だと思っんだ」

「少年だったとしても？」

「少年なら許される？ 更生する機会か？ でも、これは理屈じゃないんだ。いろいろやりたいこと、夢、希望がみんなあつたんだ。それを考えることすらできなくなつて、しかも何人もで殺された。そんなこと許されるわけがない。そうだろ？ 君だつて姉を慕つていてくれたんだ、そう思わないかい」

「思います。そうです、生きていてはダメです」

「さあ、もう帰ろう。また、飲もうな」

省吾は本当に武史が弟のような気がしていた。

『姉さん、いい教え子持つてたね』

第13章

第13章

大野理恵は迷っていた。誰に相談していいのか、香澄に聞いてもらおうと電話はしたが、それでどうするかは考えていなかった。夫の親友の弟が犯人だなんて。しかも、結婚式の司会までしてもらった人の弟。牧夫がどれほど悔やむか、もう精神が病んでいる弟は罰を受けたということか、それでいいのか。では、中野愛子さんは？ 同一犯？ そうかもしれないぐらいの不確かなことを、人に言うてはいけない。真面目で賢明な理恵は本当にどうしたらいいのか頭を抱えていた。そして、不安定なこの時期にこんな重大な悩みを抱えて、吐き気がしてきた。まずは実家に帰ろう。牧夫に連絡しておかないとと電話をした。

「もしもし、こちら大野牧夫の家の者ですが、おりますでしょうか」
「ああ、奥さん、いつもお世話になってます。大野さん、ちょっと外へ出てるんですが」

「そうですか、では、また後ほど連絡します。ありがとうございます」

悪阻で気分がすぐれない理恵は、バスやタクシーに乗りたくなくて少し歩くことにした。そして、思い出していた。あのミッキーがぶら下がっていた車内。押し込まれそうになった時に、目に入ったものだった。あとの人物の顔は暗くてわからない。でも若い子ばかりだった。聡がそうだとすると、あとは同級生のグループ？ 聡の友達を聞くことはできるはず。純も知っている人かもしれない。おそるおそる、公衆電話から関田の家に電話をすることにした。関田純は家にいた。

「あのう、大野です」

「理恵さんかい、元気ですか？」

快活な純の声が息苦しい。平静を装いながら、

「今日、聡君の見舞いに行きました。あの、聡君のお友達も見舞いに来るんですか？ お花があったから」

「ああ、武史君が来てくれるよ。木下君」

「そうですか、高校の友達ですか？」

「いや、もう小学校からの悪友さ。でも、あんなになっても訪ねてくれるのは、武史君だけさ」

「いいお友達がいて、よかったですね」

「ところで、何か用があつたんじゃない？」

「いいえ、また、うちに来てください。今日の聡君は車の絵を描いて見せてくれたんです。車の中のミッキーは聡君の車にぶら下がっていたんですか？」

「ああ、あれね、もとは僕の車だから、同級生にもらったものを僕がそのままにして、聡もかわいいとか言つてそのままぶら下げたんだ」

「そうですか、絵にもミッキーが描いてたから。元気そうだったので報告しようと思つて」

「ありがとう、刺激を与えて早く良くなってほしいから。悪いね、見舞いに行つてもらつて」

「いいえ、ではまた」

刺激を与えてか、私がもう一度傷を見せたほうがよかったかもしれない。首を振りながら忘れないように、母子手帳の隅に「きのしただけし」と書いておいた。

加納刑事は聡の高校の時の担任と話していた。聡が病気になつてしまったことなどを言いながら、昔の事件の再調査で車を持つていた子を調べていると。担任は聡の交友関係をあまり把握していないようだった。覚えているのは木下武史だけだという。なぜ、覚えているかという、武史はそれほどまじめな子ではなかったが、3年の切羽詰まつた夏ぐらいから猛勉強をして成績がぐんとアップした

というのだ。親も喜んで大学も有名校に見事入ったし、家庭教師の先生もよくやってくれたと報告があったという。

「その時の武史君の様子で、先生が変わったなあと思うところはありましたか」

「そうですね、この時期、みんな受験モードになるけど、彼は人間が変わったようでした」

「人間が？」

「ええ、受け答えも非の打ちどころがないほど。本当に素直で真面目になったんです。前は皮肉屋みたいなところがあつたんですが、全く消えてみんなの先生が手放しでよくなったと褒めてました」

「ほうつ、そんなことよくあることですか？」

「いやあ、内申書に影響するって言っても、そんなの続けることは無理です。でも、彼は本当に付け焼刃でない真面目人間になったんです。あんなこと、30年の教師生活で初めてですよ」

学校を出ると、やはり木下武史が関わっているという気持ちがあります。ますます膨らんできました。今日も武史の家を見に行くことにした。

武史の家の近くの公園で、ひとりの女性が青い顔で座っていた。

「どうしましたか？」

「はい、ちよつと気分が悪くて」

「あれ、あなたは今井さん？」

「ああ、刑事さん。お久しぶりです」

理恵は結婚して、大野理恵になったことを話した。にこにこしながら、加納刑事は聞いていた。

「刑事さんは、今日はどうしてここに？」

「ええ、あの頃の事件の再調査で、高校に行つてたんです。顔色がさつと引いた理恵を見て」

「どうしたんですか。何かあつたんですか」

「いえ、私悪阻で、気分がすぐれないんです」

「ああ、そうですね。それはおめでとう。送りましょうか」

「いいえ、車に乗りたくなくて」

「そうか、では、もう少しここですわってましよう」

「刑事さん、高校ではどんな調べをしたんですか」

「いやあ、あの頃変化のあった生徒や、車を持っていたことなんか」

「そうですか。ご苦労様です。収穫ありましたか」

「少しだけね」

理恵は聞きたかったが、そうすればこちらも聡のことを言うことになるので黙っていた。

「理恵さん、犯人は必ず捕まえます。そのままではたとえ真人間になっても、その時にした卑劣なことの罪を償ったことにはなりません。あの時に失ったものは大変なものだから」

「はい、お願いします。私の事件と、愛子さんの事件の犯人は同じでしょうか」

「多分、手口が同じですから。事件の日も近いし」

「そうですね」

肩を落しながら聞く姿に、加納は何か知っているのではという気がしていた。

「理恵さん、あなた何か知っていることがあるんでは？」

「いえ、何も。刑事さん、私帰ります。では、さようなら」

理恵はあわててタクシー乗り場に行った。加納は後ろから

「理恵さん、いつでも相談にのるから、一人で考えてはだめだよ」

とさけぶと、理恵は振り向いて笑顔でうなずいた。

第14章

第14章

香澄は理恵の家を訪れていた。

「久しぶりに会ったら、ママになるって？ おめでとう」

「ありがとう。ところで、省吾君とはどうなの？」

「うん、まあね」

紅茶を入れて持ってきた理恵は悪阻がひどく太れないという。それにしても、顔色が優れない様子に香澄は心配した。

「大丈夫なの？」

「ええ、でも、香澄にはそれより大事なことを相談したくて」

「何よ、妊娠より大事なことって」

「あの事件についてなの」

「えっ、犯人見つかったの？」

「わかんない。でも、そうかもしれない」

「どういうこと？」

「あのね、あの時の車、車内に大きなミッキーがぶら下がってたの。それを見たの」

「それって、たくさん売ってるものじゃないの？」

「そうよ、でも、実は…」

理恵は聡のことを話し始めた。夫に対して相談できない理由や、その容疑者の兄が親友ってことなど。あやふやなことだけど、あの驚き方や、それ以後精神を病んだことなど、どれも疑い出したらきりがないと。香澄は聞いているうちに、がくがくと震えてきた。あの時の恐怖を思い出していた。

理恵は話しながら香澄に聞いてもらって、どこかほっとしていた。誰にも言えないときは、本当に心が苦しくてどうにかなってしまっそうだった。香澄は理恵に

「これからどうするの？ 警察に言わないと。あなたの名前をふせて調べてもらったらいいじゃない」

「そうね、できるかしら、そんなこと」

「相手はプロよ。被害者を守ってくれるわよ」

「そうか、加納さんに話してみようかな」

「そうよ、加納さんなら頼りになる」

理恵は聡の友達のこととは加納に調べてもらおうと思い、香澄には言わなかった。香澄に相談する前は、不安で実家に帰りたいたと牧夫に話していたが、もう大丈夫なような気がしていた。

香澄は理恵の家を後にすると、省吾との待ち合わせ場所に行った。今日の理恵の話を聞いていると、その弟が犯人かも知れないしつかまったら、愛子も浮かばれると思った。省吾にも教えてあげたかった。

省吾は黒のポロシャツに綿パンで、高島屋の前で立っていた。そのポロシャツは、誕生日に贈ったものだった。

「似合うわ、それ。私ってセンスあるわ」

「そうですね、おっしゃる通りです」

二人は笑いながら、いつもの居酒屋ではなく、ホテルのレストランに行った。

「ええと、このディナーのコースを。飲み物はシャンパン」

「なあに、どうしたの。私、そんなにお金持っていないわよ、大丈夫？」

香澄はいつも割り勘でないと嫌だと、省吾に負担をかけることを拒んできた。でも、今日は省吾がおごるというのだ。

「こんなこと一生に一度かも。僕に任せて」

「じゃ、今日はごちそうしてもらいわ。よろしく」

にこにこしながら二人は乾杯をした。香澄は今日の話題に理恵の話はふさわしくない気がして、今度加納刑事に会ってから言うこと

にした。

省吾はどことなく緊張しながら、

「香澄、今日はこれを渡したくて」

小さな包みはリボンがあり、香澄はそれを受け取ると、

「これって、指輪？」

「うん、僕と一生付き合ってほしくて」

「私、ずっとこんなことないと思ってたの」

「どうして？」

「だって、だって、省吾はそんなそぶり見せたことないじゃない」

「そうさ、先生はよく考えて行動しないと」

香澄は泣き笑いをしながら、包みをあけると、きれいなブルートパースの指輪が入っていた。

「でかいダイヤはちよつと無理なんで、誕生石のトパースで」

「素敵な色。ブルートパースなんておしゃれ」

指輪を香澄から受け取ると、改めて香澄の指に入れた。

「ありがとう。省吾、本当によろしくお願いします」

「こちらこそ、香澄、待たせちゃってごめん」

二人は今日の日を一生忘れないようにしようと思った。この日は省吾はホテルに部屋を取っていた。

部屋には赤いバラ。この花は武史が送ってくれたという。

「あいつは、いいやつだな。今日、会うつて言ったら、バラを部屋に届けるって」

「そうなの、武史君が。いい子ね」

二人は赤いバラを見ながら、静かに抱き合った。

ホテルを見上げながら、武史はつぶやいた。

「お二人の幸せを祈ってる。ほんとだよ。でも、おれも幸せになりたいんだ、香澄。」

第15章

第15章

香澄は幸せの余韻に揺れていた。

仕事も順調だし、あの嫌がらせの手紙もなくなった。結婚式は身内だけで執り行われた。省吾に家族がいないので、二人だけと思っただが、省吾は香澄の家族の気持ちもあるだろうということで、ささやかな結婚式をしたのだ。一応写真も撮りたかった。そして、武史が省吾の親戚替わりで出席した。省吾が頼んだ時、武史は驚いた様子で初めは断っていたが、たつての願いで承諾したのだった。香澄は二人が並ぶと、

「本当の兄弟みたいね」

「そうかい、こんな弟がほしいよ」

武史はにこにこ笑いながら聞いていたが、昨日飲みすぎたからと顔色が悪かった。写真を撮るときに、省吾は武史を隣に座らせた。武史は緊張して顔がこわばっていた。香澄たちは新婚旅行は、夏休みにすることになっていた。香澄の家族も喜んでくれた。姉たちはもう結婚して二人とも子どもを連れて来て、いくら身内とはいえ、10人を超える披露宴はにぎやかに夜が更けるまで行われた。家族はそのままホテルに泊まり、二人は新しいマンションに帰った。武史は二人を送ると帰って行った。

「武史、ありがとう。世話になったな」

「では、明日は会社があるから、おとなしく邪魔せず帰ります」

二人は武史を見送ると、

「こんな日が来るなんて考えられなかったわ」

「うん、おれも。武史が出てくれて助かったよ」

省吾は、いつの間にか武史君から、武史と呼んでいた。本当に弟のようだと香澄は感じた。

武史は帰ると、そのままトイレに走りこんだ。自分のしたことと、二人があまりに無防備に信じてくれることがたまらなかった。結婚式に出ることが、愛子にどんなに恨まれることか、わかった時に省吾の悲しみは、怒りは、どれほどになるか。絶対に知られてはいけない。しかし、ここしばらくは、心の痛みがそうさせるのか、胃が痛くてたまらなかった。吐き気もしょっちゅうだった。

聡はこれが脳へ来たんだ。武史はそれが胃に来るのか。あとの二人は知る由もない。連絡すら来なくなっていた。周平たちは、武史たちとの付き合いも忘れることにしたのだ。賢明だ。武史もそうするはずだった。何でこんなことになったのか。省吾とも、香澄とも自分の家族よりずっと信頼してくれる二人を、武史も好きだった。特に香澄は女性として愛していた。省吾なら仕方がないと思う気持ちと、誰にも渡したくないという気持ちがいいつも武史を悩ませた。今日も二人は愛し合うだろう。当たり前だ。新婚初夜なのだ。だが、煩惱の炎が武史を包み、やがて、吐き気もどってきた。トイレに走りこみながら、武史は泣いた。

理恵はあれから悪阻がひどくなりすぎて、流産しそうだったので緊急入院していた。警察に行くなんてできなかった。牧夫は心配して、毎日、朝晩来てくれた。理恵は何も考えずに、今は子供のことだけを考えようとした。慣れない手つきで、赤ちゃんのおくるみを編んでいた。眼を酷使しないようにと言われたが、何かしてないとどうしても嫌なことばかりを考えてしまう。オフホワイトの毛糸は編んでいるだけで幸せになった。看護師さんは、

「かわいいわねえ、おくるみは2枚で十分よ」

「ええ、次はケープ」

「まあ、お店もオープンできそうね。その調子なら」

「毎日、着せ替えて遊べるわ」

「無理よ、おっぱいをあげたり、おむつを洗ったりしてるうちに日

が暮れるわよ」

「そうか、でも、旦那さんに協力してもらおうから」

「はいはい、ごちそうさま。旦那様がきたわ」

「おい、今日は純も来たよ」

「えっ、関田さん？」

「こんにちわ」

大きな花束を抱えて関田純は、微笑みながら入ってきた。彼はいい人だ。

「こんなに編んではかりでは、子供は汗をかきっぱなしだ」

「まあ、そんなことないわ、これは冬用」

「かわいいなあ。いいなあ」

純はひたすら羨ましそうに言った。

「純、お前も早く結婚しろよ」

「だめだよ、来てくれる人なんていないよ」

「そんなことないわ。関田さんなら」

「親もあきらめてるよ、弟がああいう状態だから」

「そんな」

二人とも声が出なかった。聡はここに入院していたのだ。

「聡君も元気そうだったよ」

と、牧夫は理恵に言った。理恵はよかったねと言いながら、花を生けるために花瓶を持って外に出た。

二人で何事もなかったように話をしていた。理恵は複雑な気持ちだった。聡は許せない犯人だったとしても、純は関係ない。だが、純の気持ちとして、もし、それが事実だったらこのようには付き合わなくなるだろう。理恵はやはり警察に言うことはできない気がした。

花瓶を持って入ると、

「そうそう、今日も花があつたね。聡君のところ」

「うん、昨日、木下君が来たみたいだ」

「木下って、下の名前はなんていうの？」

「木下武史だよ」

理恵は母子手帳に書いた名前を見つめていた。

「今度、いつ来るの？」

「いつも、週末だな。でも、どうかした？」

「うっん、前に見舞いに行った時も、その人が来た後だったみたいだから」

「ああ、いいやつだよ。1か月に1回ぐらい来てくれるんだ」

「今時、そんなやついないよなあ、聡君は幸せだ」

理恵は牧夫の言葉にうなずいた。そして、今度会ってみようと思った。

『やはり、忘れるなんてできないわ』

毎週末、聡の病室を覗きに行った。理恵はナースステーションの前をそつと通り過ぎ、病室の前まで行くと、中から声がしていた。

「この車も聡のだな」

「このミツキー、覚えてるよ」

「おい、俺のこと、覚えてるか？ 武史だよ」

理恵は足がすくんだ。見たらわかるか確かめたかった。

廊下の隅に隠れた。10分ほどすると、部屋から一人の青年が出てきた。これが、木下武史。あの時は暗かった。でも、背の高さはこれぐらいのような気がする。みんな大きかった。声は似ている気がするけどわからない。じつと見ていると、その視線に武史が気づいた。武史はそちらを向かず足早に帰った。

理恵はもう少し確かめたかった。気づかれないように追いかけた。さっきまでいたのに見当たらない。トイレだろうかと、近づいた途端、首に手を回され、トイレに入れられた。後ろから首を絞められ、振りほどこうとしても離さない、そうこの感覚、こいつだわ。

「理恵さん、思い出したの？ まずいよ」

と言いながら、理恵はそのまま首を絞められ倒れた。武史は指紋を消し、聡の病室に戻りナースステーションの前をわざわざ挨拶を

して通り過ぎた。

「いつも御苦労さん」

と、聡の担当の看護師が挨拶した。

武史は胃の痛みが激しくなった。しかし、満足感でいっぱいだった。

「おれは捕まらない」

第16章

第16章

加納は理恵が病院のトイレで首を絞められ、意識不明の重体という事件に奔走していた。

理恵は意識が戻らず、流産しそうという逼迫した状態だった。

牧夫は怒りで唇を震わせながら、

「理恵は2度もこんな目にあつて、いったいどうしてだ。誰がこんなことを」

「心当たりはないですか」

「全くありません。彼女は切迫流産で大事をとるために入院してましたから。病院の中の付き合いといつても、ほとんど病室から出てません」

「わかりました。ところで、この病院には関田聡君が入院してますね」

「はい、それが何か」

「聡君について何か言ってますでしたか」

「どういうことですか？ 彼はとても話ができる状態ではないですし、見舞いには行つたと聞きました」

「そうですね。また、何か思い出したら何でも連絡ください」

新聞を見て香澄はびっくりして、省吾と訪れた。

「牧夫さん、理恵さん、大丈夫？」

「ああ、でも、意識が戻らないんだ」

「なんてこと……」

香澄は牧夫の肩に手を置くと、泣いた。牧夫は疲れと不安で、涙がこぼれて仕方がなかった。省吾も姉の事件を思い出し、たまらない気持だった。だが、香澄はここまで来たら言わなければと思っていた。

「実は、彼女から相談受けていたの」

「えっ、どういうこと？」

省吾と牧夫を前に香澄は静かに話した。あの日、理恵から相談を受けたこと、つまり、聡の車があ的事件の時の車かもしれないということ。牧夫は驚きでしばらく口がきけなかった。省吾も香澄の話にがく然とした。

「でも、関田さんとは親友だし、違いかもしれないから、そんなあやふやなことを相談できなかったんだと思う」

「そんな、信じられない」

「牧夫さん、あの聡君は理恵の事件の話聞いた時から、具合が悪くなっただんでしょ？」

「そうだなあ、でも、その時点でかどうかは家族しかわからないんじゃないかな。純も理由がわからないって言ってたから」

省吾は二人のやりとりを聞いてから、

「加納さんに言おう。とにかく調べてもらわないと」

もう一刻の猶予もなかった。理恵が死ぬかもしれないのに、理恵の気持ちがどんなに伝わったか、3人とも十分わかった。

武史は新聞を見ながら、今後のことを考えていた。あの日の見舞いは看護師に見られているが、帰りも挨拶した。やましい人間はそんなことはしないんじゃないか。だが、あのしつこい刑事は納得しないかもしれない。理恵は死んだと思ったのに、意識不明、意識が戻ったら一巻の終わり。胃の痛みがまた襲ってきた。最近はず中まです痛くなっていた。ストレス？ 当然と思った。

薬局で買った胃薬を飲みながら、省吾から届いた結婚式の写真を見つめていた。

「こういう結婚できる日はもうないなあ」

写真の中で、省吾は武史を隣に座らせてくれた。

武史は無性に泣きたくなった。クールだった自分が、最近はおかしい。聡に似てきたかと思った。自分も、聡と同じ人間だ。あの二

人は自分が犯人と分かったらどうするだろうか、答えが出なかった問いに答えが見えてきたような気がした。

「俺は生きていてはいけないな」

愛子が迎えてくれるとは思えないが。地獄は生きていても同じだ。

関田純は言葉が出なかった。加納の話はとんでもない内容だった。

「弟が？ まさか」

「理恵さんがミッキーがぶら下がっていたことを思い出していたんだ」

「そんな、あのミッキーは他にもあるでしょ」

「でも、あれをぶら下げる人は滅多にいない。運転の邪魔になるからねえ。貴方も運転するときは邪魔だったでしょ？」

「はい、だから僕は乗るときは外してただけど、聡はかわいいし目立つって、いつもぶら下げていた。それにしても、聡が、理恵さんを？」

「昔は遊んでましたか、聡君は」

「ええ、でも、3年になると受験勉強をして」

「それは、この理恵さんの事件の後からですか？」

「そんな、みんな受験勉強するでしょ」

「ただ、あの理恵さんが傷を見せたときから、聡君は様子がおかしくなっただけですね」

純はあの打ち合わせの日の聡を思い出した。そうだった。

「刑事さん、徹底的に調べてください。理恵さんのためにも、聡のためにも。お願いします」

「そのつもりです。ところで、聡君の友達ですが……」

久しぶりの大雨が降ってきた。道行く人はみな、傘がまともにさせないようだ。嵐が来る。

第17章

第17章

香澄は複雑な気持ちだった。木下武史と聡は友達だ。あの頃、聡は武史のうちにも来ていた。あの事件に関わっていないとは言いきれないのではという不安。省吾は武史を信頼しきっていて、弟のように考えている。その弟が姉を殺しているということになったら、どれほどの衝撃を受けるだろうか。もちろん、香澄自身、愛子の死にどれほどつらく悔しい思いをしたことか。だが、疑っていいのかという思いもある。信じなければとも思っていた。

香澄が石田剛と東京の企画会議に行くことになった。この大事な時に省吾のそばを離れたくはなかったが、仕方がなかった。加納はいずれ武史のところへも行くだろう。真実は一つなのだから、その時は加納に任せようと考えていた。あえて、省吾には言うまいと決めていた。

石田はにこにこ笑いながら、改札口で待っていた。

「君に言っておきたいことがあるんだ」

「なんですか」

「実は結婚しようと思ってるんだ」

「あら、おめでとうございます。どなたと？」

「うん、君も知っている人だよ」

「えっ、社内恋愛？」

「ちがうよ、パーティーコンパニオン」

「わっ、ひょっとして、百合さん」

「そうなんだ」

「全然知らなかったわ。でも、うちのパーティーもすべてリリーでやってましたから、そうか、密かに付き合ってたんですね」

「いやあ、すまんすまん。別にこっそりというつもりはなかったん

「だけど」

「彼女はしっかりしてるから大丈夫。いい奥さんになるわ。じゃ、仕事はどうするのかしら」

二人はよく話し合っているようで、彩加が社長になり、コンパニオン業はすっかりやめるようだ。しかし、百合は才気あふれる人だから、うちの会社も随分と助かるはずだ。百合を選んだということで、ますます石田を尊敬した。

関田純は聡の病室にいた。

「聡、お前はだれかを襲ったりしてないかい？」

「襲う？」

「そうだよ、傷つけたりしてないかい」

「傷つける？」

きょとんとしている聡は、よく理解できない様子だ。今は完全に幼子のようだ。車を書く手を休めない。その鉛筆を取り上げてもう一度聡に聞いた。

「聡、大事なことなんだ。思い出してくれ」

「思いだしてくれ」

とオウム返しに聞き返す。最近はや安定していたが、会話にはならない。スケッチブックに描かれてる車はカローラ。そう、純の車だった。車内のミッキーを見せて、

「ミッキーはずっとぶらさげてたかい」

「ミッキー、ミッキー大好き。いつも一緒」

なんと、ミッキーだけはわかるのか。ミッキーは外さないのか。思わずがっくりした。でも、別のミッキーとの区別もつかないのではと期待した。関田はあわてて病室を出て行った。スケッチブックを持ち、聡はミッキーを描き始めた。

「僕のミッキー」

純はミニーやミッキーを6つ持って帰ってきた。ミッキーでも格好が違うものやミニーも。そして、大きさも違うもの。すでにあの

車はずいぶん前に処分してるから、あのミッキーは残ってはいなかった。しかし、同じ種類のをやっと思つてきた。

聡は病室にいなかった。床には、ミッキーが描かれたページが抜かれたスケッチブックが落ちていた。

看護師にどこに行つたか聞いたが、わからないということだった。純はいやな予感がして来て、必死で探した。純の異様な様子に看護師たちも一緒に探し始めた。

「さとしー」

「さとしーん」

聡はどこにもいなかった。

牧夫は理恵の手を握りながら、窓の近くの棚に置かれた毛糸のおくるみやソックスをながめていた。これを編んでいるときの理恵は幸せそのものに見えた。編みあがるたびに、笑つて見せてくれた。

牧夫はその笑顔の裏に隠されていた悩みを知ることがなかった自分に腹を立てていた。おなかの赤ちゃんは流産は免れていた。だが、理恵の意識はもどらない。ふと、母子手帳を手にとると、そこには「きのしたたけし」と書かれていた。これは何だろう。誰だ？　きのしたたけし。

牧夫は加納に伝えようと思つていた。何か重要なことをメモしたに違いない。だって、どうでもいいことなら、母子手帳に書きはしない。大事なことなのに書くものがないときに書いたんだ。

「理恵、見つけてやるからな。お前をこんな目にあわせたやつを、必ず見つけてやる」

理恵は静かに眠つたままだった。

省吾は今日も学校で残業していた。香澄も出張だし今日はゆつくり仕事を済ませようと思つていた。子供たちの日記に一人ずつコメントを書き、それぞれの子供の心に寄り添っていきたかった。宿題を出しても、みんなと同じことができない子供もいた。その子には、

できるだけ学校で残して済ませてやろうと思っていた。だが、
「みんなと遊びたい。一緒に帰りたい」

と泣かれてしまった。そうだ、勉強をわからせようとする時間も大切だが、一緒に遊ぶ時間はもっと大切だなと思った。その子の日記は3行で終わっていたが、

「きょうはおかあさんがあさからいませんでした。しごとはとりにくくしをさすしことです。いそがしいのでごはんはひとりです。たべます。」

と書いてあった。子供は一人でもがんばってるなあと、赤ペンを握る手も力がこもった。

そんなとき、武史の兄から電話があった。真一は内科の先生だった。

「お仕事中にすみません。お宅に電話をしたら御留守だったので、仕事先に電話をしてしまつて」

「いえいえ、どんなご用件でしょうか」

「実は、武史のごことでご相談がありまして、会ってお話したいのですが、お時間はありませんか」

「わかりました。今からでもいいですよ」

真一は丁重に礼を云い、早速、学校に車を飛ばしてやってきた。

「すみません。お忙しい時に」

「いえいえ、それより何か」

「実は武史が一番信頼を寄せているのは、中野さんなので」

「はあ」

「このところ、いつも具合が悪そうなので、うちの病院に来させたいです」

「どこが悪いんですか」

「そしたら、末期の胃がんということがわかったんです」

「えっ、そんな」

「もう、リンパから肺にまで転移していて、手術は不可能です」

「僕も近くにいながら、家族のことに全く気がつかず、なんとも悔

しい話です」

「お兄さんはほとんど病院だからと、聞いてました」
重い空気が二人の間に流れた。

「それで、私に何を」

「弟は自分が言うのも変ですが、すっかりしたやつなんです。だから、告知してもいいと思っっているんです」

「武史君は本当にしつかり者です。どんなことにも耐えられると思います。手術もできないということは、死を宣告されているようなものですね」

「ええ、私は医師としてあいつには本当のことをいいます。でも、勝手なお願いですが、あいつが頼ってきたときは支えてもらえませんか」

「私がどこまで力になれるかわかりませんが、絶対に力になれるよう頑張ります」

真一は初めて涙を流し、省吾の手を握った。

『武史、助けてやりたい』

二人の気持ちは同じだった。

第18章

第18章

聡は武史と一緒にいた。武史は病院から聡を連れてきたのだった。

「おい、聡。今日は俺が運転するから、おとなしくそこでドライブテクニックを見ててくれ」

「ミッキー」

「うん、お前の好きなミッキーだよ。あの車にもぶら下がってたな」
にこにこしながら、武史を見る聡に、

「おいおい、俺を信じ切ってるその目、いいのかい」

武史は、聡の頭をなでると、出発した。どこへ行くのか、行くあてはない。

「今日は、人生最良の日。そして、最後の日。女でなくて、お前と最後か。それもいいさ」

武史はもうこれ以上みんなのそばにいるのは耐えられなかった。

そして、兄の診察を受けたときの表情を思い出していた。

「いつから痛かったんだ」

「吐き気はいつから」

「なぜ言わなかった」

「背中まで痛いのか」

これらの言葉を絞り出すように言った。

『すべてわかつちゃった。兄貴は嘘が下手だ。もういい。捕まいたくはないし、逃げるのも嫌だ。しかし、病院はもつといやだ。最終手段は、聡と二人で：卑怯さ、一人では死ねない。わかってる。でも、聡の周りを探って、みんなを割り出すなんてだめだ。あいつらはもう別の人生を歩んでる。いいことじゃないさ。知ってるよ、そんなこと。でも、もう、俺たちから離れて生活してる。たぶんびく

つきながら。聡を恨む生活をさせたくはない。あんなことしておいて、よく付き合えたよな。二人は一生俺を許さない、いや、殺したいだろう。理恵さんも、その夫も。凶暴になるこんな男は死んだほうがいい。身重の女性を殺そうとするなんて、鬼畜同然だ。捕まりたくないってちやちな男になっちまった。かつこよく生きたかったのに。聡、お前も怖かったんだなあ。本当は俺もずっと怖かったのさ」

香澄には知られなくなかった。さげすまれる目で、見られなくなかった。愛子のあの目を、香澄からはされなくなかった。愛子を殺した時から、わかっていたはずだった。理恵のときは、車で待っていただけだった。しかし、トイレで首を絞めたとき、本当に自分のことが怖くなった。

省吾にはどうしても謝りたかった。だが、そんな謝罪の言葉は自分にふさわしくない気がした。犯罪人は最後までいやらしく、卑怯に、みんなの心にいい人の印象なんて残すもんじゃない。極悪非道でいいのだ。できれば、誰にもわからない迷宮入りの事件にしたかった。刑事は許してくれないだろうから、ここでストップ。すべてストップ。

「聡、腹が減っただろう、コンビニでおにぎりを買っておいたよ。食べるか、この先にいいところがあるんだ。景色のいいところ」

省吾は武史と連絡が取れなかった。真一の話聞いたあと、香澄にも連絡をした。電話口で泣いていた。話しながら省吾も泣いていた。

「あの若さで死んでしまうなんて」

「うん、でも、最後まで俺たちは武史のそばにしような」

「うんうん」

うなずきながら、香澄は声にならなかった。

翌日、やはり武史はいなかった。省吾はいやな予感がしていた。車で走りまわったが、武史がどこへ行くのかは全くわからなかった。

でも、家でじつとはしていらなかった。香澄がそんな省吾に

「省吾、聡君の友達って、武史君もそうなの」

「えっ、それって……」

「まさか、こんなことになるなんて。でも、家庭教師をしていた時、あの聡君、武史君の家によく来てたの」

省吾は言葉が出なかった。

『そんなことありえない。武史は騙したのか。あれほど、気持のわかる奴はいないと思ってた。信じたくない、信じられない。冷静にならないと』

香澄は顔色の変った省吾の肩を抱きしめながら

「でも、犯人じゃないと思うわ。きっと」

「そうさ、やるはずない。警察の調べでわかる」

「そうね、そうよ。加納さんが調べてる」

「香澄、僕たちは何か間違ってたかな？」

香澄は答えられなかった。省吾の苦しみが伝わってくるだけに、押し黙るしかなかった。

加納は武史が聡いいると確信していた。病院から消えたときに、二人が一緒と思っていた。どちらが主犯かわからない。しかし、たぶんちゃんちゃだった聡がそうだと。だが、理恵さんを襲ったのは武史しかない。どちらも主犯。逃がすわけにはいかん。卑劣な犯罪だ。今まで善人の仮面をかぶっていても、やったことは卑怯極まりない。

木下家はとんでもない事件に顔面蒼白になっていた。兄は

「弟は末期の胃がんです」

と言っていた。加納は聡と変な気を起こさなければいいが、やつかいなことになったと思った。

警察は二人を緊急手配した。

「加納刑事、木下武史の車を岡山で見たということです」

「岡山だと？」

その時、省吾に連絡をすると、

「加納さん、愛子の墓じゃないでしょうか」

「そうか、わかった」

「僕も行きます」

「危ないからやめたほうがいい」

「いいえ、真実を知りたいんです」

省吾は香澄と新幹線に飛び乗った。

『間に合ってくれ、武史、お前は俺に話すべきだ。真実を』

最終章

最終章

聡は武史と、愛子の眠る墓地までやってくると、楽しそうな表情が曇ってきた。

「ここいやだ、僕帰る」

「帰るわけにはいかないよ。ここでやらなきゃいけないことがあるんだから。ほら、ミッキーも一緒だよ」

「ミッキー、僕のミッキー」

武史はポケットからミッキーのトランプを取り出した。昔、このトランプは武史の誕生日に、聡がくれたものだった。

「ミッキー」

「そうさ、ミッキーだ」

墓の前に座らせると、武史はしばらくの間、手を合わせた。今までのすべてのことが、走馬灯のように目に浮かんできた。愛子との楽しかった勉強。上がった順位表を見て握手をした日、誕生日にくれたシャープペンシル。そして、命が消えるあの時の目。

「愛子先生。許してください。僕は死んでお詫びをします。許されとは思わないけど」

聡はその様子をみて、一緒に手を合わせた。真似するように。

「そうだよ、聡。こうするんだよ」

聡はにつこり笑って、しばらく武史の顔を見つめていた。

「ともだち？」

「そうだよ。聡、もう帰れるよ。ぼくはここで眠るけど。お前はやっぱり帰ったほうがいいね」

武史は車のバンパーに愛子のストッキングを結んだ。駐車場の下は5メートルの崖。

「聡、お前はあそこに見えるたばこ屋で、待っててね。あとで、行

くよ」

「あとで？」

「うん、先に行つてて。バイバイ、聡」

「バイバイ、バイバイ」

聡はとことこ歩いて行つた。武史はストッキングを首に回すと、そのまま飛び降りた。

「わーっ、やめろ、武史」

「武史君」

タクシーから飛び降りた省吾夫婦が目にしたものは、武史の飛び降りるところだった。

どんなに走つたかわからない。首に食い込んでいるストッキングを、外せない。運転手の持っていたカッターで切つたが、武史は目を少し開けて涙をスーッと一筋流して、動かなくなった。ポケットから、人間失格が落ちた。省吾の渡した本。

「武史、武史、馬鹿野郎。死ぬな。死ぬな」

香澄と運転手が、加納と救急隊員を連れてきたとき、省吾の悲鳴に近い泣き声がした。

省吾は長かつた解決への道を、墓前で報告をした。香澄はその背中を見ながら、愛子に誓つた。

「愛子、私が省吾を一人にさせないから。二人であなただの分も生きるから、安心して」

振り返つた省吾は香澄に

「武史を許すことはできないけど、あいつはきっと姉に謝つたんだろうな。俺たちを騙したかどうかわからないが、あの涙は謝罪だよな」

「そうよ、きつと。あなたを騙すつもりはなかったのよ。あなたがお姉さんの形見をくれる人だったから、最後までだますことなんてできなかったのよ」

「また、ここに戻ってきたな。人間失格」

あれから10年、加納は共犯を見つけた。二人はもう逃げられなかった。鑑識が許さない時代になっていた。

大野牧夫は、一人娘の多恵をつれて病院へ来た。

「お母さん、今日は多恵の誕生日だよ。」

カーテンを開けた多恵のほづを、まぶしそうに眼を開ける理恵が見えた。

「理恵、理恵。」

「お母さん。」

二人の声に深い眠りから覚めた理恵は、小さな声で

「牧夫さん、赤ちゃんは？」

牧夫は泣き笑いしながら

「赤ちゃんは9歳の誕生日だよ。」

多恵が理恵に飛びついて泣いた。

にぎやかな病室の前を、聡を車いすに乗せて純が散歩していた。会釈をしながら。でも、純も牧夫も話はしなかった。

京都の夏は暑い。アスファルトに陽炎がゆれている。今も昔も。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6394h/>

夏の陽炎

2010年10月8日15時04分発行